日本大学薬学部校友会

桜薬会会報

47

自主創造

日本大学

あなたとともに
100万人の仲間とともに

調剤事故の当事者にならないために

― 今、直ちに実行すること ―

日本大学薬学部病院薬学ユニット教授　中　村　　均

1. はじめに

薬剤師は、社会から医療におけるセーフティマネージャーとしての役割が期待されている。しかし、薬剤師が医療事故の当事者になる例が後を絶たない。平成18年4月1日から同年9月30日の6ヶ月間に日本医療機能評価機構へ報告された医療事故の中では、薬剤師12名が当事者となっていた[1)]。平成19年1月には、調剤過誤で患者を死亡させたとして、薬剤師2名が業務上過失致死の疑いで書類送検された[2)]。

また、保険薬局における調剤事故防止対策に関する研究報告書[3)]（日本薬剤師会）では、調剤事故の約50%が計量散剤であった。計量調剤された散剤は、計数調剤薬と比べて調剤薬に誤りがあっても、鑑査で発見することが困難な場合が多い。そこで、本講座では調剤事故の当事者とならないための散剤の計量調剤について考えてみる。

調剤事故の原因となった薬剤の剤形別分類[3)]

剤　形	件数（件）	割合（%）
散、末、細粒、顆粒、D.S.	97	48.0
錠剤、カプセル剤	80	39.6
注射剤	5	2.5
外用剤	4	2.0
その他、不明	16	7.9

（平成10年1月～平成15年3月、薬剤数202件）

2. 計量散剤の調剤

(1) 分量単位

散剤の分量は成分量、製剤量とも同じ質量単位（g、mg）を用いるために、投与量の判断が困難な場合がある。このため、ミリグラム（mg）が成分量であり、グラム（g）が製剤量であるとの解釈は極めて危険である。

演習　あなたは次の処方をどのように調剤しますか。

処方例 1

小児科　12歳　急性気管支炎
エリスロシンドライシロップ（100 mg/g）　1 g
1日4回　6時間毎　3日分

（添付文書の用法･用量欄から抜粋）

1 g中にエリスロマイシン100 mg力価を含有する製剤である。通常、成人にはエリスロマイシンとして1日800 mg～1200 mg（力価）を4～6回に分割経口投与する。小児には、1日体重1 kgあたり25～50 mg（力価）を4～6回に分割経口投与する。

（解答欄）

処方例 2

小児科　1歳11ヶ月　体重12kg
テオドールドライシロップ（200 mg/g）　600 mg
1日2回　朝食後・就寝前　7日分

（添付文書の用法･用量欄から抜粋）

1 g中にテオフィリンとして200 mgを含有する製剤であ

目　次

特集「調剤事故の当事者にならないために
― 今、直ちに実行すること ―」
日本大学薬学部病院薬学ユニット教授　中村 均 …2
牧村瑞恵氏に病院薬学賞……6
林宏行氏が医療薬学フォーラム2007で優秀ポスター賞を受賞…6
平成19年度統一地方選挙……6
薬学部OSCE参加報告 ……7
卒後教育講座のご案内……8
ユニット（研究室）だより ……9
桜の木の下で……16
薬学部ニュース……20
日本大学・日本大学校友会ニュース ……21
物故者名簿……22
平成18年度　薬学部校友会研究奨励金研究報告……23
会合予告……23
会務報告……24
平成18年度決算報告・平成19年度予算案……27
会費納入報告……28

◆表紙・写真　日本大学ロゴ（P22参照）

る。通常、小児にテオフィリンとして、1回4～8 mg/kgを1日2回、朝及び就寝前に経口投与する。
＜用法･用量に関連する使用上の注意＞
1歳～2歳未満のテオフィリン1回投与量の目安は4～5 mg/kgである。
（解答欄）

処方例 3

小児科　10歳　強直間代発作	
テグレトール細粒（500 mg/g）	600 mg
1日2回　朝夕食後　30日分	

（添付文書の用法･用量欄から抜粋）

強直間代発作の場合には、小児に対して通常、カルバマゼピンとして1日100～600 mgを分割経口投与する。
（解答欄）

処方例 4

小児科　15歳　混合発作	
セレニカR顆粒（400 mg/g）	1.2 g
1日1回　朝食後　30日分	

（添付文書の用法･用量欄から抜粋）

セレニカR顆粒は、1 g中にバルプロ酸ナトリウム400 mgを含有する徐放性顆粒の製剤である。通常、バルプロ酸ナトリウムとして400～1200 mgを1日1回経口投与する。
（解答欄）

(2) 制限量、極量

分量は原則として、添付文書の「用法･用量」欄に記載されている量が基準になる。この「用法･用量」欄には、「通常年齢、症状により適宜増減する」という表現で記載されているが、医薬品によっては制限的な表現（制限量）が用いられていることがある。制限量を超えて処方されている場合には、必ず処方医に確認する。また、第11改正日本薬局方までは、収載品目のうち極量（maximum dose）が定められていた医薬品があったが、第12改正日本薬局方で廃止された。極量とは、通例その量を超えては用いない大人に対する経口投与量のことであり、今でも調剤時の分量を判断する時の基準となる。通例は、その量を超えて用いないことから超過している場合には、必ず処方医に確認する。

極量があった医薬品の例

医薬品名	主なブランド名	極　量	
		1回量	1日量
アセトアミノフェン	ピリナジン	1000 mg	3000 mg
塩酸シプロヘプタジン	ペリアクチン	8 mg	32 mg
塩酸トリヘキシフェニジル	アーテン	－	20 mg
ジゴキシン	ジゴシン	－	0.5 mg
臭化水素酸デキストロメトルファン	メジコン	40 mg	120 mg
ハロペリドール	セレネース	－	40 mg
フェニトイン	アレビアチン	300 mg	1000 mg
フェノバルビタール	フェノバール	250 mg	500 mg
ブロムワレリル尿素	ブロバリン	2000 mg	3000 mg
硫酸アトロピン	硫酸アトロピン	1 mg	3 mg
リン酸コデイン	リン酸コデイン	100 mg	300 mg

（第11改正日本薬局方から抜粋）

(3) 乳鉢・乳棒を用いた混和方法[4),5)]

散剤同士を混ぜ合わせながら研磨することを混和という。散剤の混和は、散剤自身では拡散混合していく能力を持っていないので、外力を与え散剤同士の配列の無秩序性が増加するような方法で行なう。

本講座では、乳鉢・乳棒による散剤の混合性について、主薬の均一性が最も重要とされるジゴキシン1000倍散（ブランド名：ジゴシン1000倍散）をモデル薬剤として用いて、どの薬剤師でも良好な混合状態が確保できる混和方法について解説する。

①混和回数と混合度

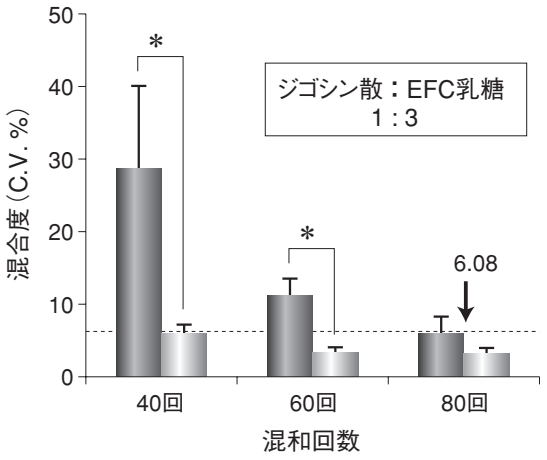
ジゴシン1000倍散と倍散用結晶乳糖（EFC乳糖）の混和において、乳鉢を調剤台に固定して混和した場合の混合度は、混和回数が増加するに従い変動係数が小さくなった。しかし、混和回数80回でも混合度（変動係数）は、約6%と良好な混合度が得られなかった。

一方、乳鉢を手に持ち、円を描くように乳鉢を回して乳鉢中の散剤をよく動かしながら混和した場合には、混和回数60回で混合度が約3%となり、良好な混合度の目安である変動係数6.08%以下となった。

混合度の評価[6)]：試料中の着目成分含量の変動係数を混合度とし、変動係数6.08%以下を混合良好とする。

乳鉢を動かして混和した場合には、乳鉢を固定した場合に比べて速やかで良好な混合状態が得られた。これは、乳鉢での混和過程は散剤の移動による対流混合と拡散混合が支配していると考えられるが、乳鉢を動かすことにより、これらの対流及び拡散効果が高くなり混合効率が向上したものと考えられる。

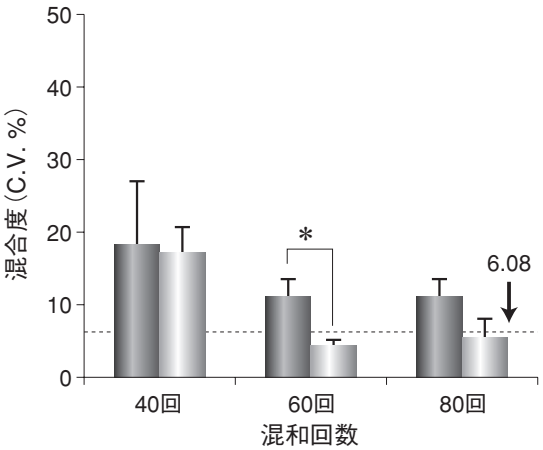
また、混和回数が60回までは変動係数の減少が認められたが、それ以上では変動係数の顕著な減少が認められなかった。このことは、混和回数が60回で混合と分離の両作用が動的平衡状態に達したものと考えられる。一般に混合過程が進行し、動的平衡状態に達すると粒子群の移動によって分離作用が生じ、混合と分離を繰り返す偏析現象が現れると言われており、60回以上の混和回数における混合度の変動に現れていると考えられる。



ジゴシン散の混合度に及ぼす乳鉢固定と回転の影響
賦形剤:EFC乳糖　■:乳鉢固定　□:乳鉢回転
（n=3　平均値±標準偏差）　*: $p < 0.05$（t - test）

②篩過と混合度

デンプンと粉末乳糖（3:7）の混合物を賦形剤に用いた場合、篩過なしで混和すると混和回数が増加しても混合性の向上が認められず、混和回数が80回でも変動係数は12％以上と大きな値を示した。しかし、篩過した場合には、混和回数が増すに従い変動係数は顕著に減少し、混和回数が60回で約3％となり、混合状態に顕著な改善が認められた。ジゴシン1000倍散は結晶乳糖及び粉末乳糖を3:1の割合で混合した賦形剤を用いて1000倍散に調製している。デンプンと粉末乳糖（3:7）の混合物は、ジゴシン1000倍散に比べ粒子径が小さく凝集性がある。このような散剤を賦形剤として用いる場合には、篩過することにより粒子間の弱い付着が切れて凝集性がほぐされるために、分散性、混合性が向上したものと考えられる。粒子径が小さい散剤の混合において主薬の均一性を得るためには、篩過が極めて重要であることが示された。



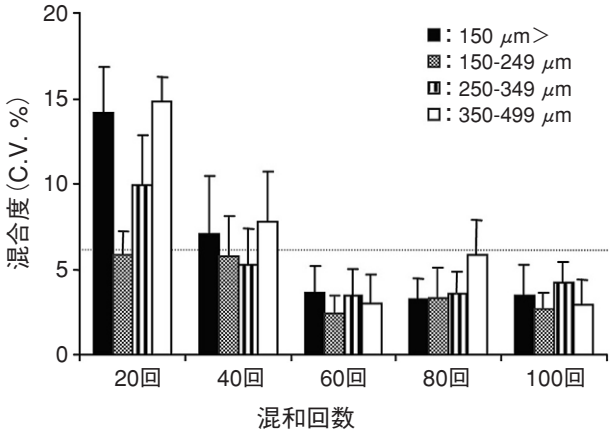
ジゴシン散の混合度に及ぼす賦形剤と篩過の影響
（乳鉢回転）
賦形剤:デンプン:乳糖（3:7）　■:篩過なし　□:篩過あり
（n=3　平均値±標準偏差）　*: $p < 0.05$（t - test）

③混和する散剤量と混合度

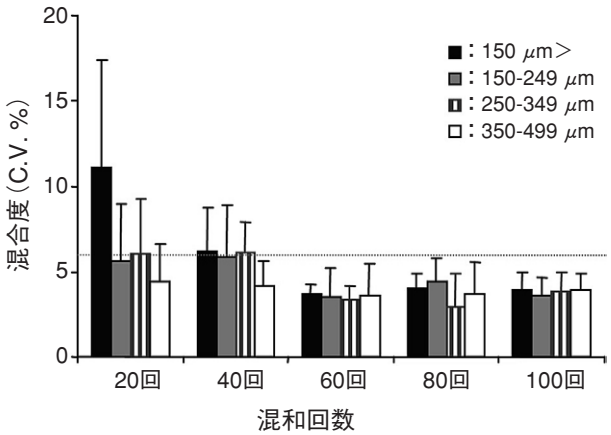
ジゴシン散とEFC乳糖の混和では、散剤量が乳鉢の容量の0.14～10.4％では良好な混合度が得られた。しかし、乳鉢の容量の20％以上では、良好な混合度が得られなかった。この結果から、調剤に際して良好な混合度を得るためには、適切な大きさの乳鉢の選択、あるいは調剤方法を工夫する必要性が示された。

④粒度分布と混合度

粒度分布と混合度については、粒度分布が同じ散剤の組合せの混和では、いずれも混和回数60回において、最も良好な混合状態が得られた。このことから、粒度分布が同じ散剤同士の混和は、粒度分布が異なる場合よりも混合度が良好となることが証明された。



粒度分布が150～249μmの着色乳糖と各粒度分布の乳糖を1:1で混和回数20、40、60、80および100回で混和したときの混合度（n=3　平均値±標準偏差）



粒度分布が250～349μmの着色乳糖と各粒度分布の乳糖を1:1で混和回数20、40、60、80および100回で混和したときの混合度（n=3　平均値±標準偏差）

⑤乳鉢・乳棒を用いた混和方法のまとめ

散剤の計量調剤で繁用されている乳鉢・乳棒による混和

方法は、散剤、細粒剤をいずれの組合せで混和する場合にも、①篩過したのち、②乳鉢を手に持ち、円を描くように乳鉢を回して乳鉢中の散剤をよく動かしながら、乳棒を乳鉢の底面に垂直に保持し、らせん状に乳鉢の中心から外側に10回、次に逆回りで乳鉢の外側から中心に戻るように10回混和し、③それを3回繰り返し、混和回数60回を目安にする。この方法で混和を行なえば調剤経験がない者でも良好な混合度を得ることができる。

3. 市販にない倍散の予製

新生児や乳児などの処方においては、市販品の散剤では秤取困難な場合がある。このような場合の調剤には、市販品の散剤を賦形剤で希釈して秤量が可能な倍散を調製することになる。しかし、用時に倍散を調製していたのでは、調剤時間が延長することになり、患者待時間が長くなる。そこで、調剤頻度の高い散剤では調剤の利便性を考慮し、倍散を予製しておくことになる。この結果、希釈の異なる倍散が2種類（それ以上）在庫することになり、取違いによる調剤過誤の危険性が発生することになる。実際に、このことが原因でジゴシン散、ネオフィリン散などで調剤過誤が発生している。しかも、これらの施設では散剤監査システムが導入されていた。リスクマネジメントの観点から、過誤発生の要因は可能な限り排除すべきであり、調剤の利便性を優先するべきでない。

4. 散剤の調剤薬の鑑査

鑑査者は自分が調剤するつもりで処方鑑査を十分に行い、調剤方法を考える。その後、調剤者が添付した記録紙を確認し、秤取量および調剤方法に誤りがないか確認する。また、調剤者が処方内容に関する疑義照会を行なっていた場合には、その妥当性についても評価する。鑑査者は少しでも疑問があった場合には必ず調剤者に確認し、必要であれば再度処方医への確認を行なう。疑問点を残したまま鑑査を終了させることがあってはならない。

5. おわりに

計量散剤の調剤は、調剤者自身によるすべての工程での確認の徹底が最も重要になる。調剤工程が多い計量散剤の調剤では、特に調剤途中で中座することは誤りの原因となるため厳禁である。

調剤は患者の病態、体質、社会的環境など患者背景を把握して、処方を評価した後、正確な薬剤の調製、適正使用のための情報提供、使用後の有効性と安全性の評価、これらの情報を臨床へ還元するまでの一連のサイクルをいう。薬剤師は医療人としての自覚と責任をもって、日々の調剤にあたることである。また、不幸にして発生した調剤事故を真摯に教訓とし、直ちに事故防止の対策を取ることが、自らが調剤事故の当事者にならないための必須の事項である。

調剤は薬剤師の本務であることを認識し、医療や科学の進展に対応できる高い資質を有する薬剤師にならなければならない。

処方例の解説

（処方例 1）

この処方の分量1 gを分量単位がグラムであるから製剤量と考えると、エリスロマイシンとしては100 mgとなり、体重2～4kgの投与量となる。年齢から考えるとこの処方分量は、エリスロマイシンとして1g（=1000 mg）力価が処方されたと考えるのが妥当である。つまり、ミリグラム（mg）が成分量であり、グラム（g）が製剤量であるとの解釈は成立しない。

（処方例 2）

この処方例では分量単位がミリグラム（mg）で処方されており、ミリグラムであるから成分量と考えるとテオフィリンとして600 mgになる。また、600 mgを製剤量と考えるとテオフィリンとして120 mgになる。

テオドールドライシロップの添付文書の「用法・用量に関する使用上の注意」欄には、1歳～2歳未満の小児に対するテオフィリンの1回投与量の目安として、4～5 mg/kgと記載されている。この患者は体重12 kgであることから、1回のテオフィリン投与量の目安は48～60 mgとなり、1日量としては96 mg～120 mgとなる。この処方量は製剤量600 mg（テオフィリンとして120 mg）と判断するのが妥当である。つまり、ミリグラム（mg）が成分量であり、グラム（g）が製剤量であるとの解釈は成立しない。

なお、分量の判断が困難な場合には、処方医に確認するべきである。また、医師は処方時には、分量の後ろに「成分量」あるいは「製剤量」と記載することにより、処方分量がより明確になる。

（処方例 3）

テグレトール細粒のような1 g中に成分であるカルバマゼピンを500 mg含有している散剤（50%散）は、処方分量が成分量か製剤量か明確に判断できないことがある。

この処方分量を成分量とするとカルバマゼピンとして600 mg、製剤量として600 mgと考えるとカルバマゼピンとして300 mgとなり、いずれの量も臨床上用いられる。このような場合には、必ず処方医に確認する。また、医師は処方時には、分量の後ろに「成分量」あるいは「製剤量」と記載することにより、処方分量が明確になる。

処方の正しい記載例

小児科　10歳　強直間代発作 テグレトール細粒（500 mg/g）　　600 mg（製剤量） 1日2回　朝夕食後　30日分

（処方例 4）

この処方分量を成分量とするとバルプロ酸ナトリウムとして1200 mg、製剤量として考えるとカルバマゼピンとして480 mgとなり、いずれの量も臨床上用いられる。このような場合には、必ず処方医に確認する。また、医師は処方時には、分量の後ろに「成分量」あるいは「製剤量」と記載することにより、処方分量が明確になる。

引用資料

1. 医療事故情報収集等事業第6回報告書（平成18年9月13日）、医療事故情報収集等事業第7回報告書（平成18年12月26日）、財団法人日本医療機能評価機構医療事故防止センター
2. YOMIURI ONLINE（読売新聞、平成19年1月16日）
3. 平成14年度厚生労働科学研究「病院等における薬剤師業務の質の向上に関する研究」分担研究、「保険薬局における調剤事故防止対策に関する研究」報告書、平成15年3月
4. 中村　均ら、散剤の混合度に及ぼす混和条件の定量的解析Ⅰ、病院薬学、23、305-311（1997）
5. 中村　均ら、散剤の混合度に及ぼす混和条件の定量的解析Ⅱ、医療薬学、27、491-494（2001）
6. ①古座谷　醇ら、調剤用細粒の粒子径と混合性について、薬剤学、29、53-56（1969）②金久保好男ら、カプセル剤中の粉末と顆粒あるいは数種の顆粒の混合度、薬剤学、35、159-163（1975）

略歴

教授　中村　均（なかむら ひとし）
昭和24年4月3日 東京下町生れ

職歴

昭和47年3月　日本大学理工学部薬学科卒業
昭和47年4月　東京大学医学部附属病院薬剤部研究生
昭和48年3月　東京大学医学部附属病院薬剤部
昭和57年2月　家業（保険薬局）に従事
昭和60年2月　東京大学医学部附属病院薬剤部
平成06年4月　千葉大学医学部附属病院薬剤部へ転任（副薬剤部長）
平成11年1月　東京大学医学部附属病院薬剤部へ転任（副薬剤部長）
平成17年4月　日本大学教授　薬学部病院薬学ユニット
平成19年4月　（併任）薬剤師教育センター長
現在に至る

その他　博士（薬学）
日本医療薬学会認定薬剤師
日本医療薬学会指導薬剤師
日本医療薬学会評議員
日本薬剤師会調剤業務委員会委員長

賞　千葉県病院薬剤師会薬事功労賞（平成９年）
日本病院薬剤師会病院薬学賞（平成17年）

★おめでとうございます★

牧村瑞惠氏に病院薬学賞　学会活動や後進の育成で

第10期（S.40年）卒業の牧村瑞惠氏（日本大学医学部付属板橋病院薬剤部長・日本大学教授）が琉球大学薬剤部長　芳原準男教授、群馬大学薬剤部長　堀内龍也教授らと伴に2007年度病院薬学賞を受賞しました。

授賞式は6月2日に東京都渋谷区の日本薬学会長井記念館で行われました。同賞は薬剤師の倫理、学術水準の向上などを目指す日本病院薬剤師会が選定するもので、病院薬剤師の地位向上や臨床薬学、病院薬学分野で顕著な業績をあげた薬剤師に贈られるものです。先生がこれまで行った学会活動や病院内外での後進の育成が、総合的に評価された結果です。

林宏行氏が医療薬学フォーラム2007で優秀ポスター賞を受賞

校友である林宏行氏（昭和60年卒）が本校の臨床薬剤学の松本宣明教授らと日本薬学会医療薬科学部会の医療薬学フォーラム2007において、優秀ポスター賞を受賞なさいました。発表の題目は「MRSA剤投与期間に影響を及ぼす要因解析」でした。この会は日本薬学会の主催する会で、大変権威ある大会です。林さんは現在聖マリアンナ大学の横浜西部病院薬剤部に薬剤師として勤務される傍ら研究を続けられています。今後、益々のご活躍を期待いたします。

平成19年度統一地方選挙

4月8日に実施されました統一地方選挙で下記の校友が当選されました。

昭和34年卒　楢崎　近氏　佐賀県議会議員
昭和46年卒　渋谷　正氏　山口県議会議員

心からお祝い申し上げます。
皆様の益々のご活躍を期待しております。

事務局からのお願い

学会等で多くの会員の方々がご活躍のことと存じます。しかし、実際にはなかなか皆様のご活躍を知ることが出来ません。今後なるべく本会誌でご紹介して行きたいと考えております。何か御座いましたら桜薬会までお知らせ下さい。

薬学部OSCEへ参加協力

会報46号でお知らせ致しました薬学部OSCEは予定通り平成19年4月22日（日）に実施されました。薬学領域におけるOSCE（客観的臨床能力試験）は6年制薬学教育の中でも発展途上のカリキュラムで、6年制後半に実施される臨床実習に向けて実力のある学生に育てるための教育カリキュラムです。他校の学生と比して母校の学生が見劣りするようなことがあっては困ります。このOSCEは卒業生が協力できる唯一の教育カリキュラムです。皆様の参画をお願いします。

次　回　：12月16日（日）
協力申込締切期日：11月9日（金）
申込先：薬学部校友会事務局

薬学部OSCE参加報告

OSCEを見学して

日本医科大学千葉北総病院
薬剤科長　福田　恵子
（昭和52年卒）

薬学教育6年制が始まりはや2年が経過しました。平成22年には6ヶ月実務実習が開始される事でOSCEトライアルが各大学で実施され始めました。その中で、日本大学薬学部においてはいち早く準備を開始しており、今回見学する機会がありましたので、その感想を述べさせていただきます。

OSCE：Objective Structured Clinical Examination　客観的臨床能力試験と聞いても、イメージがわかない。というのが本音でした。

学生が実際に模擬患者へ面接を行い、患者に対する十分な知識・技能・および態度を有しているか否かを見るものである。』と説明されれば、『百聞は一見にしかず』、教育の技法を知らない実務者ですが、打ち合わせで“シナリオ”の存在を知り、後は経験があれば十分対応できるということを今回実感できました。また、本学OSCEの良い点は、初回面談、服薬指導時の模擬患者さんを近隣の住民の皆さまに協力を得ている事です。一般の方の自然な会話が、より実践に近づけたものになっていました。ただ、多くの学生に効率よく行うため、いたし方の無い事ですが、一斉にどの分野も同一時間で行う事は今後検討の余地があると思います。

今後　更に良いものにするためにより多くの方が参加・体験し、意見を反映していく事で発展していくものと考えます。

長い間病院勤務薬剤師として実習生を見てまいりましたが、実務と教育、双方がお互い理解・実施できる事が今後の薬学教育につながる事と感じました。

OSCE評価者をしてみて

八千代中央薬局　秋元　光徳
（平成10年卒）

このたび、4月22日に薬学部において行われたOSCEに評価者として参加いたしました。OSCEとは、薬局や病院での実習に臨む前に必要な学力が身についているかを確認するテストです。

処方監査、計数調剤、計量散剤調剤といった課題の中で、私がうけもった処方監査は処方せんを見て疑義照会すべき点を指導薬剤師に報告するというものでした。（指導薬剤師の役もさせていただきました。）処方せんの内容には薬剤の規格が不明なもの、用法用量に矛盾があるもの、糖尿病患者に禁忌となっている薬剤などの記載がありました。（添付文書やお薬手帳が用意されており、患者さんが糖尿病薬を服用していることが確認できるようになっていました。）

規格違いや用法用量の矛盾点は比較的答え易かったようです。課題に取り掛かる時間が五分と限られていた為か、本来の実力を発揮できなかった後輩もいました。添付文書やお薬手帳を活用するのが難しかったのか、患者さんが糖尿病薬を服用していることにたどり着けなかった後輩が多かったです。

一分間の評価の際には個々の評価に加え、お薬手帳の重要性を話しました。薬局では、お薬手帳を通して患者さんのお薬の飲みあわせを確認することが、薬剤師として重要な業務のひとつになってきているからです。もちろん現場では重要なことは沢山あります。ここ数年、薬剤師の質が大きく問われるようになってきている中で、実際の実習では薬剤師がどのように薬を扱い、どのように患者さんと向かい合っているか、多くのことを学んで欲しいと思います。

後輩達が真剣にテストに取り組み、評価を聞く姿を見て、OBとして大変嬉しく思いました。私も勉強を重ね、後輩たちが立派な薬剤師になる手助けとなるよう、これからもOSCEや学生実習に携わりたいと考えてます。

卒後教育講座のご案内

◎第112回

日時：平成19年11月8日（木）

演題：医薬品販売制度改正と薬剤師職務の変化

講師：日本大学薬学部薬事管理学ユニット教授　白神誠　先生

内容：2006年より薬学教育6年制が施行され、国民の健康の維持や疾病の予防など、あるいは臨床に役立つ薬剤師の育成が求められ、国民の目に見えるかたちで薬剤師の役割を明確にしなければならない。医療費削減の中に薬剤師の新しい職能を紹介して頂く。

当番ユニット：薬品分析学（内倉和雄、木村由美子、四宮一総）、薬品分子化学（本橋重康、鳥山正晴、三浦基文）、ドイツ語（山崎良介）

◎第113回

日時：平成20年1月17日（木）

演題：インフルエンザと漢方薬

講師：今田屋内科　今田屋　章　先生

内容：インフルエンザの治療薬タミフルは、副作用として異常行動による死者が続出し処方を控える医師が増えている。タミフルの代用としてはリレンザかアマンタジンがあるが、リレンザは吸入薬であるため服薬指導の手間が掛かり、アマンタジンは耐性ウイルスや中枢神経系の副作用が懸念され、敬遠されることが少なくない。この様な中、麻黄湯等の漢方薬が注視されている。インフルエンザの治療に漢方薬の投与に関してお話を頂く。

当番ユニット：有機化学（宮入伸一、三宅宗晴、内山武人、齋藤弘明）、薬品物理化学（齋藤好廣、田口博之、橋崎　要）、創薬化学部門付（道祖土勝彦）

◎第114回

日　時：平成20年3月6日（木）

テーマ：薬学教育6年制における日本大学薬学部の実務実習対策

演題１：実務実習事前学習の考え方と取組み

講師：日本大学薬学部病院薬学ユニット教授　中村　均　先生

内容：本学における薬学教育6年制の事前学習を含めた6ヶ月間の実務実習の目的は、医療における薬剤師の役割と責任を理解させ、本務である調剤を通して医療のセーフティマネージャーとしての基本を教育することである。

演題２：薬学教育におけるOSCE（Objective Structured Clinical Examination）の意義

講師：日本大学薬学部臨床医学ユニット准教授　小野真一　先生

内容：6年制薬系大学・学部では平成21年度よりOSCEとCBT（Computer-based Testing）より成る教養試験が実施される。どこも本実施に向けたシステム構築とトライアルに四苦八苦である。この状況では、医学部・歯学部に比べ人的資源が物理的に乏しい薬系大学・学部では、OSCEの実施そのものが目的となりがちである。本講演では、本学におけるOSCEトライアル実施状況の紹介を通して、薬系大学・薬学部におけるOSCEの意義、問題点、展望について述べてみたい。

当番ユニット：薬剤学（伴野和夫、鈴木豊史、古石誉之）、病院薬学（中村　均、濃沼政美）、セルフメディケーション学（安川　憲、松原秀樹）、生体機能化学（飯島 洋）

◎受講案内

会場：日本大学会館（千代田区九段下南4-8-24）

最寄り駅：市ヶ谷駅

JR中央線下車　徒歩2分

東京メトロ　有楽町線・南北線、都営地下鉄線下車　A2出口　徒歩0分

受講申込方法：当日申込のみ（予約不要）

受付開始時間：17時30分より

参加資格：特になし（出身校等一切不問）

受講料等：1,000円

受講者には受講証と受講資料を差し上げます。日本薬剤師研修センター研修シール（1単位）を交付いたします。

問い合わせ先　日本大学薬学部庶務課 Phone 047-465-2111

現在、講座の開催日時が教授会と重なる日が出ており、第2週の木曜日から第4週に変える、曜日を変える等の検討を行っています。委員会では、受講者の皆様のご意見を尊重したいと考えています。是非とも忌憚の無いご意見を下さいます様、お願い申し上げます。また、各方面でご活躍の方々の講演を企画していますが、ご希望の講演内容が御座いましたら、お気軽にご連絡頂ければ幸いです。有意義な講座にしていきたく、皆様方のご協力をお願い申し上げます。

日本大学薬学卒後教育実行委員会委員長　安川　憲

連絡先：self-med@pha.nihon-u.ac.jp

（迷惑メール防止のため@は、全角で表示しています。）

ユニット（研究室）だより

生体機能化学ユニット

（3号館3階355）

飯島　洋
（いいじま ひろし）

本年（平成19年度）に基礎薬学系創薬化学部門に新設されました生体機能化学ユニットを担当いたします飯島洋と申します。どうぞよろしくお願いいたします。昭和59年に菌類二次代謝産物の生合成メカニズムを酵素レベルで解明する研究で博士号を取得後、23年間、企業研究所で生体高分子の立体構造に基づく活性化合物の分子設計を中心に研究を行って参りました。

着任して数ヶ月が経ちました。周囲の教員の皆様に支えられて、どうにかやってこられたというのが正直な感想です。私は教職の経歴がありませんでしたが、前期に分担させていただいた学生実習での学生とのやり取りを通じて、大学教育で自分が何をどう教えたらいいのかということが、少しイメージできたところです。今までの蓄積が無いので、これから行う講義は私なりに一から組み立てることになります。これは非常に大変なことですが、過去の経験がないということが、逆に強みの面もあるはずだと思っています。有機化学教育の一部を担当するので、この夏休みは学生が使用しているマクマリーの教科書を勉強しています。私が学生だった時代と比較すると、生物関連の分野が大きく変化しているのに、有機化学の内容はあまり変わらないように思えます。近年の学生は有機化学が苦手ということですが、最近はニュースなどでもいろいろな科学研究の成果が報道されますが、学生の目にふれるサイエンスとしての斬新さの差が、有機化学は薬学という生命科学分野における大事な基礎の一つであると言う意識を薄くさせているのかも知れません。生命現象と化学反応の原理のようなものとの関連を説明することで、有機化学や物理化学が持つ深い輝きを学生に感じてもらえるように、工夫してゆく所存です。

一方、研究の方は、まだ研究室の整備すら十分な着手ができていないお恥ずかしい状態ですが、志としては、生体分子の機能を制御する物質の探索を通じて、ちょっと格好良く言えば、Chemical Biology的な研究、そして、創薬に関する新しいアプローチを提案するような研究を目指しております。私が学生のころ、「直接見ていないはずなのに、有機化学の先生がまるで分子を見たように話すのは不思議だ」と思っていましたが、当ユニットでは化学で生体機能を感じるような研究を行い、学生が分子が観える感覚を身につけられるようにしたいと思います。そのためには他の研究ユニット、学部外との共同研究なども積極的に行ないたいと思っております。本ユニットは、まだ私一人だけですが、次の卒研からは学生を受け入れることになっております。配属学生や近い将来の院生、研究生が研究を通じて、苦しみと楽しみを味わえるようにしたいと思っております。

六年制教育の導入に伴い、桜薬会の皆様にはご各方面でのご支援をいただいておりますが、大学における教育・研究にも、今後ともご指導、ご支援を御願い申し上げます。

ファーマシューティカルコミュニケーション学ユニット

（1号館3階132）

当ユニットは設立２年目で、本年初めての卒研生４名を迎えました。本ユニットの研究のテーマは薬剤師と患者の服薬コミュニケーションに関連すること、薬剤師の自身のコミュニケーションの向上です。「薬剤師のリアリティショックとその対応」「薬剤師のキャリア形成に関する考察」等、９月末の医療薬学会の学術大会では卒研生全員がポスターにて研究発表を行います。医療従事者である薬剤師は患者さんへのコミュニケーション能力の開発が、よりよいファーマシューティカルケアを行う際に絶対不可欠です。また、自分の仕事の周りにいる医師や看護師、そして薬剤師の同僚とのコミュニケーションもよい仕事をしていく上で重要です。そのようなことでセミナーでは継続してアクションラーニング（Action Learning）をメンバーで行っています。アクションラーニングとはグループディスカッションの一つの形で、問題解決のみならず、チームワーク、個人能力も向上させるシステムのディスカッションです。通常のディスカッションではそれぞれが意見を言いますから特定のメンバーの発言に偏ったり、座っているだけで参加しないメンバーができてしまいます。アクションラーニングの大きな特徴は「質問中心」で議論を進めるという点です。質問の効用は数々あり、一人の問題提起からスタートしても、ほかのメンバーがしっかりとコミットすることによってそれぞれが持つ自分自身の問題の解決にもつながっていきます。それぞれが自分の抱える問題の解決をしながら進んでいくことが大きな成長につながります。コミュニケーションの授業でもアクションラーニングを取り入れていますが、「コミュニケーション」は座学だけでは習得できません。演習や実践がその能力を高めることに有用です。本年６月には寄付講座のキャリアデザインもできました。来年度は大学院に進学するメンバーもおり、益々研究室としてもにぎやかになってきています。大学院生の研究では広い視野をもって新しい薬剤師の職能を広げるということを

大きなテーマに取り組んでいく予定です。最後に写真は7月末に始めての教室旅行に皆で大阪へ！行ってきました。USJで遊び、大阪の美味しいものを沢山食べてきました。

（井手口　記）

分子細胞生物学ユニット （3号館1階311）

今年の夏は大変な猛暑に見舞われましたが、卒業生の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。研究室の近況をお知らせいたします。渡邊先生は今年の3月にご定年を迎えられ、4月から小川先生が教授となりました。7月に行われた渡邊先生の退職パーティーには数多くの卒業生の皆様にご参加いただき、誠にありがとうございました。詳細につきましては「桜の木の下で」の頁をご覧いただきたいと思います（渡邊先生は、現在特任教授として学生の就職指導にあたられています）。小川先生は教授となった途端に会議の目白押しとなり、なかなか研究に時間が取れないご様子ですが、4月から加わった大学院1年生の佐藤さんとともに、真菌の分類に関する研究に取り組まれています。草間先生は大学院2年生の宮野君、山﨑さん、吉野さんとともに、神経変性疾患に関する研究に取り組まれていますが、朝早くから大学に出勤され（ご主人の影響？）、教育研究にお忙しい毎日です。なお、教員組織の変更にともない、草間先生は准教授、須田は助教に名称が変わりました。

今年度の卒業研究生は15名（男性5名、女性10名）が配属されました。8月の初めには箱根に1泊2日の研究室旅行に行ってきました（写真はその時の集合写真です）。大涌谷、芦ノ湖、彫刻の森美術館などをめぐり、自然と芸術をゆっくりと楽しむことができました。夜の宴会では普段はあまり話す機会の少ない学生さん同士もいろいろな話をすることができ、親睦を深めた様子でした。現在はそれぞれのテーマに分かれて卒業研究に励んでいますが、総合講義試験や国家試験に向けての勉強にも余念がない様子です。来年の春には無事薬剤師となってくれることを祈るばかりです。

最後になりましたが、皆様のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。

（須田　記）

薬理学ユニット （3号館1階312）

桜薬会会員の皆様におかれましては益々御健勝のこととお慶び申し上げます。薬理学ユニットの近況についてお知らせ致します。

当ユニットに多大なご貢献を頂きました荒川基記助手は、昨年9月より日本大学医学部附属板橋病院薬剤部に異動となり、薬剤師実務教育の充実のために活躍されています。また、荒川氏は、これまので研究成果をまとめられ、日本大学より博士（薬学）を取得されました。現在のスタッフは、伊藤芳久教授、石毛久美子准教授に加えて、昨年9月より荒川氏の後任として、助手（本年4月より助教）としてお世話になっている私、小菅康弘の3名で教育・研究の更なる充実を図るべく努力しています。また、昨年に引き続き、木原哲朗博士、阪田泰子博士が研究員として在籍しております。本年の3月には、昨年度の卒業研究生12名が無事卒業致しましたが、うち7名は本学の博士前期課程に進学し、4月から各々所属のユニットで研究活動に励んでいます。社会に巣立った5名も、現在は、それぞれの道で活躍していることと思います。

本年度も当ユニットには多くの学生と大学院生が在籍しており、大変賑やかな研究室となっております。昨年度より所属している博士前期2年の4人に加え、新たに7名の大学院生（当ユニットより5名、有機化学ユニットより1名、社会人1名）が加わり、夜遅くまで研究に励んでいます。さらに、12名（女性11名、男性1名）の個性溢れる四年生が配属され、総勢28名の大所帯となりました。毎年恒例の卒業研究旅行は、7月30日から31日にかけて鬼怒川・日光に行ってきました。初日は悪天候のため、計画していたライン下りが中止となってしまいましたが、温泉三昧で日頃の勉強（？）疲れを癒し、お決まりの懇親会で夜遅くまで大いに盛り上がりました。2日目は日光東照宮や華厳の滝を見学し、湯葉やこんにゃく作りを体験しました。幹事の用意周到な準備のおかげで楽しい時間を過ごすことが出来、教員、大学院生、卒業研究生が十分に親睦を深めることができたと思います。残りわずかとなりましたが、大学生活の集大成として充実した時間を過ごし、来春には全員揃って卒業し、国家試験に合格し、社会にでることを願っております。

6年制教育がスタートし、薬学をとりまく環境もますます厳しさを増しておりますが、会員の皆様方には今後ともご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願いいたします。最後になりましたが、皆様のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。また、11月17日（土）にアルカディア市ヶ谷にて薬物同窓会が開催されますので、同窓会会員の皆様にはご出席いただきますよう重ねてご案内申し上げます。

（小菅　記）

微生物学ユニット　(3号館1階314)

日増しに秋も深まってまいりましたが、桜薬会会員の皆様におかれましては益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。当研究ユニットの近況をお知らせ致します。

井口先生は昨年度に引き続き1年生の早期体験実習の中心となり忙しい日々を過ごされております。板垣先生、小林先生、私(元吉)も井口先生のご指導の下、変わらず研究・教育に励んでおります。板垣先生と小林先生は研究や授業、実習等でお忙しい中でも担任としてきめ細やかに学生の指導にあたられております。

昨年度の卒研生は学生生活との違いに戸惑いながらも、社会の一員としてそれぞれの場所で頑張っているようです。

本年度に入りM2の川澄賢司君が約半年間の病院実習を終えて大学に戻って参りました。実習での経験を踏まえて、気持ちも新たに意欲的に研究を行っております。また小林由梨さんが博士前期課程に進学し当ユニットの一員となりました。控えめな性格ではありますが、芯が強く、朝早くから夜遅くまでコツコツと頑張っております。卒研生は男性3名、女性12名の計15名が配属されました。行動力のある学生が多く活気にあふれております。大学院生の2人も研究だけでなく勉強や精神面でのサポートもしてくれて卒研生たちの絶大な信頼を得ております。前期試験が終わってまもなくの7月末には群馬県みなかみ町へ卒研旅行に行って参りました。ラフティングやバーベキューをしたり地元の花火大会を見たりと盛り沢山の一日を過ごし、1日目の締め括りにはもちろん宴会が行われました。明けて2日目もそば打ちや押し花の小物作りを体験し帰路に就きました。それぞれの係りの頑張りもあり、かなり内容の濃い旅行となりました。要所、要所のイベントではクジ引きによるグループ分けをしたため、普段はあまり話す機会がない人とも話すことが出来て、より親睦が深まったようです。後期に入り卒研生も研究や勉強に忙しい日々を過ごしております。まもなく医療人の仲間入りをすることになりますが、残りの学生生活の中で色々な経験を積んで少しでも人として成長して巣立って欲しいと思います。

現場でご活躍の諸先輩方のお力添えを頂き、6年制も2年目を迎えましたが、まだまだ課題はたくさんあるように思われます。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、会員の皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。　(元吉　記)

機能形態学ユニット　(3号館1階315)

桜薬会会員の皆様におかれましては各方面で御活躍のこととお慶び申し上げます。また、昨年度配属された卒研生(実験組12名、演習組3名)15名のそれぞれの道での今後のご活躍を期待しております。

機能形態学ユニットの近況をお知らせ致します。

平成19年度の本研究室は教員4名(草間教授、木澤准教授、齋藤助手、益子)に博士前期課程2年4名及び1年2名の大学院生を加え、教育・研究活動に日夜励んでいます。新たに15名(実験組10名、演習組5名)の個性溢れる卒研生が配属され、4月から実験組は卒業研究の実験も始まり、研究室が賑やかになっています。短い期間ですが、研究室生活を大いに満喫してもらえればと思います。

5月初めには研究室の懇親会があり、今年度初の研究室イベントで、卒研生同士また教員・院生と卒研生の親睦も十分深めました。

6月終わりには長瀞へ1泊2日の研究室旅行に行きました。長瀞は埼玉県の西北部、荒川の中流域に位置する景勝地で、国指定の名勝・天然記念物である長瀞岩畳で有名なところです。初日はボーリング大会や恒例の夜の研修会(宴会!?)で大いに盛り上がりました。研修会では青汁の一気飲みをした人や怪しげな仮装をした人もいて……。ちなみに青汁を飲んだのはボーリング大会優勝草間教授チームの面々です。翌日は岩畳を観ながらの荒川ライン下りをして、ほんとに景勝でした。また、みんなでうどん作りに挑戦しました。作ったうどんをその場で、自分達で調理して、食べ比べをしてみると味も歯ごたえも千差万別、なぜかいろんな味が楽しめました。性格が出るのでしょうか?!　現在、卒研生は卒業研究の中間発表の準備のために連日研究室で頑張っています。

さらに後期は研究発表会、卒業論文作成、さらに卒業試験、国家試験と卒研生には忙しい時期になりますが、是非頑張って残りの学生生活を有意義なものにしてもらいたいものです。

6年制教育が始まり、薬学をとりまく環境も非常に厳しい状況ではありますが、校友諸兄姉におかれましては今後とも御指導、御鞭撻の程宜しくお願い致します。

最後になりましたが、会員の皆様の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。　(益子 記)

生化学ユニット （3号館2階321）

記録的な猛暑が続いておりますが、桜薬会会員の皆様におかれましては各方面において益々のご活躍のこととお慶び申し上げます。

平成19年度も当ユニットは教員3名（安西教授、小林准教授、大橋）、そして博士後期課程3年の大学院生1名（樋口君）で、教育・研究活動に日夜励んでおります。本年度の卒業研究生は11名（男性5名、女性6名）が配属され、5月に卒研生との顔合わせを兼ねたコンパが行われました。また、例年通り4年生の企画立案で7月31日に卒研旅行へ行ってきました。まずは、埼玉県にある国営武蔵丘陵森林公園へ。公園内は一日ではまわりきれないほどの広さで、さまざまな広場やマラソン・サイクリングコース、アスレチックなどがあり、皆それぞれに散策やバドミントン、アスレチックなど童心に返って遊んできました。汗を流した後は、各自持参したお弁当で昼食。こういうのもたまにはいいですね。続いて訪れた場所は、森林公園から少し離れたところにある稲葉農園。朝のうちは涼しい気候だったのですが、お昼頃にはかなり暑さが厳しく、農園までの道のりが遠く感じられました。ここでは、桃狩りを楽しみました。稲葉さん曰く、今年は日照りが例年より少なく、まだ熟していないとのこと。気温が37℃以上の日が続くと、どんな桃でもおいしく熟すそうです。なので、この連日の猛暑で、今ではおいしい桃が出荷されているのではないかと思います。そして、桃狩りの後は、ボーリング大会で盛り上がりました。日帰り旅行でしたが、みな楽しく親睦を深めたようでした。これから後期に入り、卒業研究や卒業試験、国家試験という試練が待ち構えていますが、この残り少ない学生生活を充実して過ごしてほしいと思います。

最後になりましたが、会員の皆様のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。 （大橋　記）

衛生化学ユニット （3号館2階324）

薬学を巡る環境はめまぐるしく変化し、その中で十分な教育ならびに研究を行い「衛生化学」のアイデンティティを明確にする必要があります。我々は「健康を科学する(Health Science)」を目標として「生活習慣病の分子生物学」ならびに「微量元素の役割と疾病への関与」を中心研究室員一同精力的な毎日を過ごしております。現在の本ユニットは教員3名（手塚、榛葉、渡邉）、大学院生7名ならびに4年生11名の構成であり、なかでも大学院生は8月以降たてつづけで学会での発表を控えており、日々深夜に至るまで実験をしております。

本年度の4年生はユニークな者が多く、新歓コンパではそれぞれ得意の一芸を披露してくれました。このユニークな4年生達の企画のもと、本年度の研究室旅行は河口湖へと1泊2日のバス旅行を行いました。病院薬局実習のスケジュールが各自異なるため普段研究室員全員が揃うことは少ないのですが、今回の旅行は大いに盛り上がり深い絆が築かれました。今後、進学するもの、企業に就職するもの、薬剤師として現場で働くもの、それぞれではありますが、卒業生の皆様方の暖かいご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

教員に関してはご存知の方も多いと思いますが、本年度より大学教員の職階の名称が変更され、それに伴い榛葉は助教授から准教授へ、渡邉は助手から助教と職階が変更いたしました。手塚教授は学務担当として6年制と4年制が混在するカリキュラムが滞りなく進むよう日々お忙しい時間を過ごされています。

榛葉は月－水曜日は講義、木－金曜日は学生実習の日々に加え、今年度より開始される文部科学省選定ハイテクリサーチセンター整備事業をはじめとして、文部科学省科学研究費補助金（科研費）に関わる研究ならびに企業との共同研究と複数の研究プロジェクトの推進に力を傾けており、渡邉は科研費による研究を中心に学生実習でも多忙を極めております。

研究ユニットの日々の変化はHP上にても紹介しておりますので（http://eisei.pha.nihon-u.ac.jp/）、そちらもご参照ください。

薬剤師の職域を広める上で「衛生化学」の果たす役割は重いものと研究室員一同心得ております。その責務を果たす上で、卒業生の皆様方のご協力は欠かせないものであります。今後とも変わらぬご支援のほどよろしくお願いいたします。

（榛葉　記）

環境衛生学ユニット （3号館2階325）

桜薬会会員の皆様におかれましては、益々ご活躍のこととお喜び申し上げます。

当ユニットの近況をご報告させていただきます。4月より新しく卒業研究生が14名（男性11名、女性3名）配属されました。配属されてすぐの5、6月、また8月にはそれぞれ病院あるいは調剤薬局にて2週間または、1ヶ月間の実習を行いました。病院・調剤薬局の先生方にご指導いただき学校教育の中では知ることのできない『現場』を体験し、学生一人一人、それぞれの目標がより現実に近いものになったようです。また、病院実習・調剤薬局実習の際には、桜薬会会員の皆様にもお世話になったかと存じます。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

病院・薬局実習後は、皆それぞれの卒業研究課題・卒業試験合格などの目標が明確になり、現在は卒業研究・論文検索、演習講義、さらに卒業後に控えた薬剤師国家試験合格への努力が期待されます。

大学院生は博士課程前期２年の学生が、これまで取り組んできた研究をまとめ修士論文を完成させるべく日々研究・論文作成に勤しんでおります。４月より博士課程前期（医療薬学コース）の学生が当ユニットに配属されました。現在、６ヶ月間の病院実習中で、日々実習に励んでいるようです。

また３月に社会人大学院の博士課程前期を修了した浦野敦氏（東邦大学医療センター佐倉病院、薬剤師）が、４月から当ユニットの研究生として在籍しております。これまで修士過程で行った研究のさらなる発展を目指し、研究を進めています。

当ユニットのスタッフ４名（山中先生、立川先生、加藤先生、溝井）は今後も研究と教育に尽力いたします。桜薬会会員の皆様におかれましては、ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

最後となりましたが、桜薬会会員の皆様のご健康と益々のご活躍を祈念いたします。　（溝井　記）

ゲノム創薬学ユニット　（3号館4階343）

桜薬会会員の皆様におかれましてはますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

ゲノム創薬学ユニットはお蔭様で2年目を迎えることが出来ました。研究室はこの4月に335Bから343に引越しいたしました。今年度は初めて卒業研究生も配属され（実験組2名、演習組2名）、研究室の体制も少しずつ充実してまいりました。実験組は早々に春休みから卒業研究を始め、それに伴い研究室の中も活気が漲ってくるのを感じております。研究が立ち上がりつつある中で様々な面で苦労をさせていると思いますが、彼らは熱心に実験に取り組んでおり無事卒業研究を仕上げてくれるものと期待しています。夏休みが終わると、卒業研究生にとっては卒業まで余すところ半年となります。卒業試験・国家試験の勉強にこれまで以上に励んでもらい、来春には全員そろって卒業し、国家試験に合格し社会の第一線で活躍することを願っております。

末筆になりましたが、桜薬会会員の皆様のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げますと共に、今後ともよろしくご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。　（小林　記）

病院薬学ユニット　（5号館2階524）

暑い夏もやっと終わり、ようやく過ごしやすい季節となりました。桜薬会会員の皆様におかれましては、ご健勝にてお過ごしのこととお慶び申し上げます。平成17年度に開設された病院薬学ユニットもお陰様を持ちまして３年目を迎えることができました。当ユニットは、中村均教授と筆者（濃沼：専任講師）の教員2名で運営しており、国民に求められる薬剤師を育成するために日々、教育および研究に力を尽くしております。本年の主な研究テーマは、「医薬品に起因した医療事故の発生要因の解析」、「多変量解析やテキストマイニングを用いた教育および臨床研究手法の開発」、「新たな病院薬剤師業務のあり方に関する調査」等です。また、本年度から修士大学院生を受け入れることとなり現在4名の院生が配属されております。２名は既に製薬企業や大学で活躍している社会人院生であり、日常の業務内容に関する問題点を解決すべく研究に打ち込んでおります。学内の院生は、「データベースを活用した事前実習教育プログラムの開発」や「統計的品質管理の応用による糖尿病自己血糖管理に関する研究」をテーマに研究に励んでおります。そして、本年度は卒業研究生が７名配属されました。彼らにはグループの共通テーマとして「医療事故」を取り揚げ、調査研究を行っています。最近では卒業論文の提出期日が早まったことからも、全員が夏休み中も頑張っておりました。

ところで来る平成19年10月27日（土）、場所は日本大学会館に於いて、日本医療薬学会第27回医療薬学公開シンポジウムが日本大学薬学部と茨城県病院薬剤師会の共催によりが開催されます。本シンポジウムの実行委員長は中村均教授と筑波大学の幸田幸直教授の両氏が務める事となっており、本ユニットが事務局を担当しております。シンポジウムのメインテーマは「医療に求められる薬剤師育成のための実務実習」ということで、目前に迫った６年制実務実習を成功させるためにも、大学、病院、薬剤師会の先生方と本音で語り合う活発なシンポジウムとしたいと考えております。昨年度から6年制薬学教育が開始されました。6年制教育では約半年間の実務実習が義務化され、実務に携わっておられます諸先輩方には、今後も多くのお力添えを頂くことになろうかと思われます。ご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。末筆となりましたが、桜薬会会員の皆様のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。

（濃沼　記）

薬事管理学ユニット　（5号館3階535）

桜薬会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝にてお過ごしのこととお喜び申し上げます。

平成19年度の薬事管理学ユニットは、教員3名（白神教授、泉澤専任講師、詫間助手）、大学院博士後期課程5名（社会人）、前期課程11名（うち社会人4名）、卒業研究生12名、研究員4名、研究生4名が在籍しております。5月には新年度顔合わせ会が開催され学生は社会人院生の皆様と交流し大きな刺激を受けたようでした。4～6月には医療薬学社会人コースの当ユニットが担当する医薬品評価学、医薬品情報学特論が開講され、多くの著名な先生方にご講義いただきました。研究面では大学院生は薬剤経済分析など

を始めとした多彩なテーマに取り組み、また卒業研究生も各自のテーマをたて薬剤師や患者へのインタビューなど積極的なフィールドワークに熱心に取り組んでおります。9月に行われる日本社会薬学会などで卒業生、大学院生が学会発表を予定しております。

7月28日のオープンキャンパスでは、当ユニットの社会人院生、卒業生の皆様方にご協力いただいた「薬剤師にはいろんな活躍の場があります！」というポスターを研究室の廊下に貼りだし、多数の高校生・父母の皆さんにご覧いただきました。これから入学を考えている皆様に薬剤師の仕事に関し具体的にお話しできたので、大いに興味を持っていただけたように思います。

今年の研究室は男性が増えたこともありスポーツにも力を入れております。ボーリング大会のほか、5月の薬学部スポーツ大会では薬事管理学ユニットとして初参加したソフトボールで決勝戦まで勝ち進み、惜しくも優勝の野球部チームには負けたものの、準優勝を飾ることが出来ました。また、8月初旬には伊東温泉にて1泊2日の研究室旅行を開催しました。ビーチバレー、バーベキューや花火などでも盛り上がり研究室メンバーが親睦を深め楽しい時間を過ごすことが出来ました。これも4年生の旅行係さんの献身的活躍があってのことです。

これからも社会の現場で活躍されておられる皆様からのご意見を賜り、私どもも研鑽し現場へフィードバックし実践してまいりますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。末筆ではございますが、会員の皆様方の今後の益々のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。　（詫間　記）

健康・スポーツ科学ユニット　（6号館1階616）

桜薬会会員の皆様におかれましては、各方面において益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。

健康・スポーツ科学ユニットの近況についてお知らせいたします。

今年の所属教員の昇格があり、私西川が助教に昇格となり、松原准教授（助教授）とともに2名で日々教育と研究に励んでおります。また今年度より、卒業研究生2名（男性1名、女性1名）の配属が7年振りにあり、昨年よりも賑やかな研究室になりました。

8月31日～9月1日の1泊2日で館山へ卒業研究旅行に行って参りました。初日の鋸山ではロープウェーに乗り、地獄のぞき、日本寺の大仏までの名所を散策しました。しかし、あまりにも山道がきついため大仏には辿り着けずに断念しましたが、途中“地獄のぞき”から眼下に広がる絶景に全員が感動しました。夜の懇親会では学生と教員の親睦を深めるとともに、遠く群馬県から駆けつけて下さったOBの福島雅幸さんに講話をしていただきました。薬局の現場においてご活躍なさっています福島さんの講話に全員が熱心に耳を傾けており、卒研生には大変良い情報を与えて頂きました。2日目はさながらハワイのような景色、南房パラダイスや白亜の野島崎灯台、鯛の浦など周辺の観光巡りをしました。2日間たっぷり歩いたせいか誰もが疲れておりましたが、植物や動物、自然と直に触れ合うことで心身ともにリフレッシュできたようです。

後期になりますと、いよいよ卒業論文完成に向けての最終的なまとめとともに、演習講義、総合講義など授業・試験や国家試験に向けての勉強が本格化して参ります。来春には我が研究室の全員が無事卒業し、重ねて国家試験に合格できることを願っております。

現在、後期授業の準備と9月14日から行われる日本体力医学会の研究発表に向けて多忙な日々を過ごしております。今年度も11月初旬の文化祭頃に保健体育学研究室の同窓会を開催したいと思いますので同窓生の皆様には多くの方々のご出席を宜しくお願い致します。

最後になりましたが、会員皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。　（西川 記）

セルフメディケーション学ユニット　（5号館2階525）

研究室が発足して４年目に入りましたが、2004年度は649室を居室として、その後の２年間は525教室に仕切りをして教授室と居室、2007年4月から2年間は626セミナー室を教授室、525教室を居室として使用しています。研究スペースは、657B溶媒蒸留室、657A防爆室の一部を初年度からお借りしていますが、昨年度から研究員、研究生、大学院生が入室してスペースが足りなくなり、333B恒温室をお借りして研究をしてまいりました。しかし、大学院生、卒研生の増加により、更にスペースが足りなくなり、８号館に薬剤系の新実習室が竣工した事から、使用しなくなった647実習室の一部を9月より、他の研究スペースを持たないユニットとの共同使用でありますが、研究スペースが2009年3月まで確保出来、ホッとしているところです。

大学院博士前期課程社会人コースの小川光一氏（M2）

は、メタボリックシンドロームとサプリメントをテーマに実験を進めています。今年度は、後期過程に劉　素延さんと同社会人として針ヶ谷哲也氏が、進学してきました。二人とも、本学前期過程修了の一期生です。前期過程には、今年卒業した秋田綾子さんが進学し、ユニットも大学院生により活性化してまいりました。卒業研究生は、8名（男子2名）と昨年同様に華やかになりました。現在、病院・薬局実習も終了し、卒業研究や国試対策の勉強に打ち込んでいます。8月には、ユニット研修旅行で鬼怒川へ行き、川下りで暑さを凌ぎ、英気を養ってまいりました。研究員の孫　奕（Sun Yi）博士は精力的に研究を進め、現在2報の論文を投稿しています。

研究活動では、ユニットのメインテーマであるがん予防・抗炎症等で昨年度8報の論文を発表することが出来ました。その他に、学部のハイテク・リサーチに参加しており、これはメタボリックシンドロームをテーマに松原助手を中心に研究を進めています。

私安川は、2月16日にホテルニューツカモトで行われた千葉県薬剤師会検査センター技術セミナーで、「サプリメントの有効利用」と題してサプリメントの問題点とその有効的な利用法について講演しました。また、千葉県生涯大学福祉生活科のテキストに「薬草の話」を執筆し、12月には同大学福祉生活科・園芸科で「薬用植物」の講義をすることになっています。同大学は、65歳以上が入学条件で、リタイヤ後に更に勉強をしたい方々ばかりだそうです。

10月13・14日には、本学をお借りして第5回日本セルフメディケーション学会を会長として開催致します。学会では、特別講演、大会会長講演、3つのシンポジウムと一般発表を行います。卒業生の皆様には、学会の協賛のためにご協力頂き、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。また、昨年度から千葉県を中心に、本学卒の千葉大学の池上文雄教授（17期）、中村智徳講師（34期）、漢方家の橋場則昭氏（本学24期）と共に、城西国際大学薬学部の堀江俊治教授、懸川友人教授と千葉市生涯学習センターで、奇数月の第2土曜日にサプリメント医療薬学研究会を開き勉強会を続けています。そろそろ、サプリメントの正しい知識を薬剤師・一般市民に発信して行こうと考えています。卒業生諸兄姉の参加をお待ちしています。

末筆ながら、卒業生の皆様のご健勝をお祈り申し上げますと共に、ご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

（安川　記）

臨床医学ユニット

（6号館4階645）

紅葉が目に染みる季節になりました。桜薬会会員の皆様におかれましては益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。臨床医学ユニットは臨床薬学研究室として発足して以来8年目を迎え、現在は昨年に引き続き、鈴木孝教授、小野真一准教授、浅見覚助教、田畑恵市助教の4名のスタッフで研究・教育を行っております。今年も14名の個性豊かな卒業研究生が配属され、卒業研究、病院・薬局実習、国家試験対策、就職活動等のタイトな日々を送っております。大学院博士後期課程には社会人大学院生2名（大塚進、中山敏光両氏）にD1として徳田栄一君が加わり、博士前期課程はM2に渡辺俊輔君、M1に大川枝里子さん、原田理香さんという布陣で、精力的に研究を推し進めております。徳田君は小野准教授と共に7月にカナダのモントリオールで行われた国際トキシコロジー学会に参加し、筋萎縮性側索硬化症の治療薬に関する研究成果を発表することができました。また、卒業生の山口祐之、西村怜子両氏の研究成果もまとまり、それぞれ学術誌に掲載されました。

春のスポーツ大会では、臨床医学ユニットとして今年もソフトボールチームを結成し、「臨床医学メタボリックス」として旋風を巻き起こしました。とはいえ、今年は初戦で惜敗し、その後の打ち上げで“メタボリックス”の本領を発揮するという結果になってしまいました。

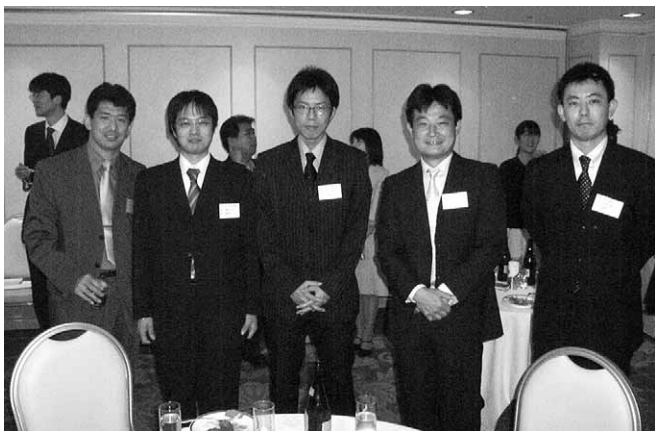
長い梅雨が明けたばかりの8月1～2日には、卒業研究旅行で日光・那須を廻りました。今年の卒業研究生の将来を暗示すべく好天に恵まれた2日間、こんにゃく・ゆば作り体験や乳搾り体験、東照宮歴史散策、那須山、殺生石めぐりと、盛りだくさんのスケジュールをこなしながら親睦を深めることができました。卒業研究生にとっては生涯の仲間との思い出の１ページを彩ることができたのではないでしょうか。

最後になりましたが、薬学教育も新時代を迎え、これに対応すべく建設された8号館には模擬薬局や模擬診療室をはじめとする教育・実習設備が整いました。これらを活用し、充実した教育を行うべく邁進する所存でありますが、実務教育の完成には桜薬会会員の皆様のお力添えが必要不可欠であります。今後とも御指導、御鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

（田畑　記）

桜の木の下で

第18回桜神会を開催して



さる、2007年5月18日（金）横浜ホテルキャメロットジャパンにて第18回桜神会を開催いたしました。

当会は、神奈川県内の医療機関に勤務する病院薬剤部（局・科）長を中心に組織され、歴年2回の開催（実際には諸事情により不定期となった年も多々ありますが）を目標に運営されております。

大学からは今回校友会会長の山内先生がご都合によりご欠席となりましたが、替わりに渡邊和子先生にご出席賜わることが出来ました。そして前回からは、伊藤先生、荒川先生にも引続きご出席頂きました。また、内倉先生におかれましては浜っ子ということも有りまして、これまでにも数多くご出席頂いております。６年制移行での長期実習等の準備に関するお話など興味深い話題をご提供頂きました。

また、最近では若手の先生方の参加も徐々に増えつつあり次回からは、全県に勤務する本学出身の病院薬剤師の先生方皆さんにも参加を呼びかけようと考えております。

この桜神会では、毎回夫々の近況を報告しあうだけではなく、病院薬剤師業務の中での意欲的な取り組みについての情報交換など和気藹々の中にも大変有意義な意見交換が行われております。また、諸先輩からは、工学部薬学科時代の頃のお話しや、理工学部薬学科時代の御茶ノ水キャンパスでの頃の思い出など毎回懐かしいお話で盛り上がっております。

是非、神奈川県在勤、在住の先生方には今後も積極的なご参加をお願いいたしまして第18回桜神会のご報告とさせていただきます。

桜神会に関するお問合せは

桜神会　会長　藤本　康嗣（横浜新緑総合病院　薬剤部
TEL 045-984-2400）まで

薬学部校友会山形県支部総会・懇親会

風薫る季節ではありますが「さくらんぼ」の時期には少し早い5月26日に4年ぶりに校友会を開催いたしました。本部から山内盛会長、渡邊和子先生（副会長）の出席を頂き、また小林髙明山形県工科系校友会会長をお迎え致しました。

今回は以前からおいで頂くことをお願いしていた渡邊和子教授が退官され校友会副会長になられた事で、ようやくおいで頂くことが出来念願かなった校友会となりました。当日は、土曜日の夜という設定時間でしたが県内から20名（約80名在県）の出席者があり、久し振りに顔を合わせた方、今回初めて参加して下さった方達と時間のたつのを忘れる程の賑やかな会となりました。さらに小林会長からは理工学部木村秀政教授（YS11開発）の元で学生時代を過ごした懐かしい話題も提供され、お茶の水時代を過ごした者には嬉しい一時でした。渡邊先生からは、これから後輩達が校外学習として各地で実施される実習に対して協力要請もあり、現在も大学が身近に感じられ、早速先生と話しを進めている後輩もおりました。当然、二次会に多くの方が参加し時間を忘れる1日となりました。

出席者からは、次会は多くの校友が出席出来るよう日曜日昼開催と毎年開催という要望もあり、幹事役の日野富子・伊藤秀悦両氏と共に、今後とも楽しい校友会を開催し日大薬学部卒業生間の連携をはかって行きたいと思っております。（文責　北村光孝）

9期生の集い

平成19年7月8日（土）明治記念館で9期生の同窓会を開催しました。

来賓として宮尾、山内両先生にご出席いただきました。

今回は、同期生の渡邊和子さんが今年3月末をもって薬学部を定年退職されたので、われわれ9期生と母校との橋渡しに力を貸していただいたことの感謝と、薬学部教授として長年にわたり教育のみならず学生の進路指導などに多大の尽力をされてきたことに対する労いの会でもありました。

3年前に卒後40周年の会を開催したにもかかわらず、その時とあまり変わらない56名の参加者がありました。

遠く愛媛県からの参加者もあり、第一線を退かれ悠々自適に過ごされている方がいる一方現役でご活躍の方も多く、薬剤師の強みを感じました。

卒後43年という歳月は、多くの学びの友（20余名）を失いました。会に先立ち全員で黙祷しました。

渡邊和子さんから現在の母校の様子や6年制になった薬学教育の諸問題についてお話があり、ご苦労も多いことなどわれわれの時代との差を感じました。今後も学校に残られるとのこと、引き続き9期生のパイプ役をお願いできそうです。

参院選が近いということもあって、薬剤師の地位向上には一人でも多くの議員を国会に送ろうと、何人もの方々がマイクを握っていました。

2時間の語らいはあっという間に過ぎ、次回の再開を楽しみに散会しました。（小山　記）

第12期生卒業40周年記念同期会

歳月人を待たずといいますが、私達12期生も卒業して、はや40周年を迎えました。

論語に「孔子曰く、益者三友、損者三友。直キヲ友トシ、諒ナルヲ友トシ、多聞ヲ友トスルハ益ナリ。……」とありますが、還暦も過ぎ、人生の行路をながく共に歩んできた仲間達は勿論、“益者三友”でしょう。

平成19年7月8日（日）お茶の水の東京ガーデンパレスにて、当時、生化学をお教え戴いた澤村良二先生、薬品分析化学をお教え戴いた杉井篤先生、そして校友会会長の山内盛先生のご出席を戴き、12期生同期会を開催しました。野澤克己さんの司会で、物故者への黙祷から始まり、富良野の蓮川さんより差し入れのワインなどで乾杯し、両先生のご近況と当時のエピソードを交えたお話を伺う頃には、出席した同期生32名は、学生時代のあの頃にタイムスリップして和やかな楽しい会となりました。当日は9期の同期会も開催されていた為、遅れてご出席戴いた桜薬会会長の山内先生より、配布した6月23日の校友会総会の資料をもとに、大学の最新情報をお聞かせ戴きました。当時の各卒論の研究室も、呼称がユニットに変更と同時に時代のニーズでしょうか、組織の編成が大きく変わり、卒論の研究室そのものがなくなってしまったところもあり、一抹の寂しさを感じた人もいたようです。ペーパー薬剤師としましては、6年制教育への移行と、なにわともあれ在学期間納付金総額12,700,000円との報告にこれから薬学を志すのも大変だなというのが感想です。暫し歓談したところで全員の自己紹介となりました。皆、すっかり貫禄がつき、メタボリックシンドロームとやらが大いに気になる私達ですが、その雄姿は最後に撮った記念写真をとくとご覧下さい。

二次会は同ホテル二階のバープラネットに席を移して26名が集まり、話の続きで大いに盛り上がり、次回、より多くの方々とお逢いできることを楽しみにして散会しました。

（小野内常子　記）

渡邊和子教授のご退任をお祝いする会

分子細胞生物学ユニットの渡邊和子教授が、この春ご定年で退職されたことは前号でお知らせしたとおりです。去る７月14日に、理工学部と薬学部の門下生が中心となって「渡邊和子教授のご退任をお祝いする会」が東京ヒルトンで開かれました。会には卒業生、現役の学生および現旧教職員合わせて220余の方々が出席されました。また、116名の方々から記念品のみのご参加がありました。

初めに、発起人を代表して74年卒の日向一正さんと私が渡邊先生のご略歴の紹介とご挨拶させて頂いた後、安西偕二郎薬学部長、山内盛薬学部校友会会長からのご祝辞がありました。続いて、澤村良二名誉教授が乾杯の音頭とられて、歓談となりました。今回の会は若い世代の女性の参加者が多く、先生のご退任をお祝いするのにふさわしく華やいで和やかな雰囲気になりました。会の後半、77年卒の大塚（旧姓林）さん、93年卒の河本さん、97年卒の鈴木（旧姓渡邊）さんから先生への感謝を表すユーモアに富んだスピーチがあり、続いて花束と記念品（52型ハイビジョン液晶テレビ）の贈呈がありました。渡邊先生からお礼のお言葉があり、先生の研究・教育生活を支えた人の和、活躍している教え子の姿を見る喜びなどのお話後、参加者の今後の活躍を祈られてご挨拶を結ばれました。最後に83年卒の網仲さんが合気道着姿で登場し、先生にエールをお送りし、生物研・分生研同窓会長の羽地さんが先生にお礼とお祝いの言葉を述べて閉会となりました。

渡邊先生を囲んでの楽しいひと時はあっという間に過ぎてしまいました。当日、悪天候やご都合のためお越し頂けなかった方には、写真を掲載させて頂きましたので雰囲気を味わって頂けたらと存じます。

渡邊先生は平成19年6月1日より国家試験対策、就職指導を担当される特任教授として薬学部にお勤めになっていらっしゃいます。今後の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

分子細胞生物学ユニット　小川吉夫

渡邊 和子 教授のご退任をお祝いする会

渡邊 和子 教授のご退任をお祝いする会

渡邊 和子 教授のご退任をお祝いする会

渡邊 和子 教授のご退任をお祝いする会

卒業30周年記念同窓会

同窓会の愛称を『薬茶48会』と命名

同窓生の皆様、お元気でお過ごしのこととお慶び申し上げます。

さる７月15日（日）に昭和48年入学者：有志一同は卒業30周年記念同窓会（80名参加）を水道橋の『東京ドームホテル42Fシリウス』において開催しました。

当日は7月には珍しい大型の台風4号に直撃され大荒れの天候となりましたが、4名の先生（沢村良二先生、宮尾利政先生、山内　盛先生、渡邊和子先生）をはじめ、全国から76名の同級生達が集い盛大な同窓会を開催することができました。

お忙しいなか、ご参加いただいた先生方に心より御礼を申しあげ、風雨のなか全国からかけつけてくれた同級生の皆様ありがとうございました。悪天候のため、4名の同級生が飛行機の欠航や新幹線の不通により参加できなかったことが残念でなりません。当日は皆さんが到着するまでヤキモキしましたが、交通機関の乱れをみこして前日より東京入りした遠方の方々が多く、幹事として感謝にたえません。

我々の学年には現：日本大学薬学部において教授を務めるふたりの同級生がおります＝当日の会では高畠 亨君には学校の近況報告、伊藤芳久君には乾杯の音頭をとっていただきました＝いつもながら両名には同窓会を盛り上げていただき感謝しております。

今回は、我々の同窓会に愛称を付けることになりました。そこで、愛称とその由来を事前に公募し、会場で参加者全員の投票により選ぶことにしました。その結果、8作品の中から、増田ひで（旧姓：岩谷）さんの作品が最高得票を獲得し、豪華景品が贈呈されました。それは『薬茶48会（やんちゃヨンパチかい）＝ヤンチャ・ヨンパチ会』です：命名の由来は【薬学科卒業＋御茶ノ水で学んだ＋昭和48年入学者の会＝今でもヤンチャな私達】です。

今後、我々の同窓会の正式名称（?）として案内状等に用いようと思っています。

それでは皆さん2年後の『薬茶48会（やんちゃヨンパチかい）』でお会いしましょう！　お体を大切にお元気でお過ごしくださいませ。

（菅野圭介　記）

薬学部ニュース

公開講座を開催

6月2日(土)　恒例の薬学部公開講座が女子栄養大学の香川芳子先生を講師に招いて開催された。講演には293名もの方々が朝早くから集まった。

先生のお話で印象に残ったのは、「栄養を取って、不足するカロリーを炭水化物で補うように。子供のときはオッパイを飲むので乳糖をみんなが分解できるが、一般に大人になると酵素が分泌されなくなる。牛乳を主な栄養源としていた遊牧民（白人も含む）はその酵素が大人でも分泌される人が多い。牛乳は栄養価が高いので飲んで欲しい。飲めない人は、ヨーグルトを食べてください。ヨーグルトは栄養は同じですが、乳酸菌によって乳糖が分解していますから下痢の心配はありません。」などです。

また、同時に薬草園が開放され390名もの方々が北中先生や生薬研究会の話に耳を傾けました。

オープンキャンパスが開催される

オープンキャンパス

7月28日（土）全日と8月22日午後にオープンキャンパスが開催された。参加者は約800名と300名、合計で1000名を越える盛況であった。教職員と学生皆の協力で恙無く終了した。安西学部長の全体説明、安川入試担当教授の入試説明と多くの先生による進学個別相談、井口教授と高畠教授の模擬講義、物理化学、薬品分子化学、生化学と機能形態ユニットによる体験実験、学生の引率によるキャンパスツアー、生薬研究ユニットと研究会による薬草園見学などに多くの受験希望者が集まり好評であった。来年度の入学生から学費が改定されることもあり、「この所、薬学全体が低下傾向にある中、受験生の回復に結びつけば」と、期待されている。

実務実習室（模擬薬局）完成

今年4月に8号館が完成し、模擬薬局のスペースは確保されていたが、この8月末に調剤機器の搬入が終了し、名実共に模擬薬局が完成した。早速、9月より病院実習(事前実習)で使用が開始された。クリーンベンチ（7台），安全キャビネット（2台）、オートクレーブ（1台）、散剤鑑査システム（2台）、水剤鑑査システム（2台）、自動錠剤分包機（2台）、薬袋印字機（2台）、散剤自動分包機（4台）など最新の機器が揃えられシステム系は全てLANで結ばれている。そして、オーダリングや薬歴システムも稼動し、最先端の実習が行われる。その他に薬局窓口、市販薬のカウンターや模擬診療室も完備している。

日本大学薬学部教員人事

教授発令　('07.7.1)

飯島　洋

（新設；生体機能化学、キリンビール株式会社より）

特任教授発令　('07.6.1)

渡邊和子（就職対策、国家試験対策など）

実務実習室（模擬薬局）

日本大学・日本大学校友会ニュース

役員総会開かれる

日本大学校友会役員総会（会長・副会長・常任委員・委員・監事391名で構成）は7月2日、後楽園ドームホテルで役員284名（薬学部校友会5名出席、2名欠席）を集めて開かれた。

報告・連絡事項に続き、18年度収支決算・監査報告、補助費交付・特別補助費交付・会則一部改正・19年度事業計画・収支予算案が審議された。

事業計画では校友会館設立のための資金積立・校友子女入試の推進・全国校友大会の開催・箱根駅伝の振興と推進につき審議され、それぞれ可決された。

開会に先立って「日本大学が2年後の平成21年に創立120周年を迎えるのでその記念の年に校友会館を完成させたい」と力強い会長挨拶があった。

全国校友大会開催のご案内

役員総会で承認された「全国校友大会」は11月12日（月：18時開宴）、東京ドームホテルで開催されます。

この全国校友大会は卒業生であれば誰でも参加することが出来ます。詳細は日本大学校友会企画委員会で審議されています。この会報がお手元に届く頃にはすべてが決定していますので、詳細は薬学部校友会（TEL 047-465-1478）に問い合わせて下さい。全国校友大会は懇親を図ると同時に多くの情報を交換できる場所でもあります。多くの校友の参加をお待ちしています。

日本大学「教育理念」及び「ロゴ」等が制定されました

6月1日開催の日本大学理事会で下記の主旨に基づき統一シンボルとして「教育理念」、「ロゴ」及び「キャッチフレーズ」が制定されました。（表紙参照）

主　旨

教育の理念は日本大学の目的と使命の中で自主創造が謳われていること。現在の日本がキャッチアップの段階から成熟期を迎え「自主創造」の気風に満ちた若者・人材の育成が求められていること。21世紀が知の世紀と強調され、その知が「積極的な知」、つまり「自主創造の知」であり、グローバリゼーションに対応できる人材の要諦が「自主創造」であることなどに注目し「自主創造」とする。

ロゴ（Nドット）は本学の頭文字の「N」を力強く躍動感のある書体であらわし、［N］の横の点は「日本精神」「日本の伝統・文化の尊重」「個の尊重」とともに「輝く太陽」を意識している。色は日本大学カラー「緋色」（DIC157番）を使用し、NICHIDAI REDと称する。

キャッチフレーズの「あなたとともに100万人の仲間とともに」は学生と校友に愛情をこめた連帯感のある表現で本学のパワーと大学・学生・校友の絆を表わし、本学のみがいえる表現にしている。

物故者名簿：心より御冥福をお祈り申し上げます

（19.8.31現在）

1期　秋葉(小島)君代, 穐山(住谷)たつ子, 浅見(如範)勝久, 石岡圭吾, 伊藤博, 岩田裕子, 岩本太助, 海老沢一郎, 加藤克好, 北野圭克, 木下(菅野)禎子, 木下肇, 木村雄吉, 黒田幸一, 高(石田)玲子, 香西明, 佐藤重佐久, 杉山茂, 鈴木(中野)栄, 高村富士子, 武本信也, 田代信子, 田村徹, 林健二郎, 久富一弥, 松崎哲三, 丸岡昭一, 丸田(鈴木)圭子, 村松敬介, 森山芳昭, 山下佳宏, 吉澤秀明, 吉富(鈴木)貞子, 吉富秀志, 凌自強

2期　石塚(武藤)光二, 石橋義弘, 内田実, 江本(嶋田)悦子, 大川(島田)清子, 大須賀豊子, 小師国彦, 佐藤壮治, 皿島(武部)久子, 進藤(米沢)麗子, 鈴木英夫, 高山茂, 冨田(伊藤)修, 橋詰照義, 林博信, 原田(山口)英子, 松永(佐藤)泰子, 三宅(森本)宣子, 三輪明代, 本橋清, 森田純雄, 横山(金子)澄子

3期　伊藤利夫, 江畠義文, 海老原保治, 大川規一郎, 大貫吉万, 鍛治智恵子, 神蔵一雄, 栗原和正, 斉藤修哉, 斉藤英夫, 斉藤(佐藤)怜子, 清水(佐藤)裕子, 杉山(渡辺)宏行, 鈴木聰明, 高野尚道, 富原(当山)孝子, 中沢頼之, 中村進, 長沼千恵子, 別当有通, 前田和徳, 松井豊, 松嶋(小野)幸江, 宮本(片山)かほる, 村上明代, 弥永日向, 山田隆昭, 山本(辻村)紀子, 渡辺(関根)恵見子

4期　朝井靖, 荒川鉄郎, 石津敬満, 和泉昭夫, 岡広, 片尾淳一, 鈴木(水谷)道子, 高橋(早部)幸子, 豊島茂雄, 野村明, 波多江嘉亮, 堀谷肇, 真鍋(馬場)幸子, 毛利(平田)恒子, 山口裕啓, 吉橋欣也, 渡辺博信

5期　金沢将員, 川上忠重, 君島正彬, 坂本芳夫, 里見章, 田中(下島)みさと, 波多和人, 浜田安雄, 本多(森田)寿子, 山内(古田)育子

6期　相澤(富樫)孝子, 秋田智之, 阿部(兼子美津)美津子, 安藤邦夫, 宇佐美快昭, 片掛友厚, 加藤都喜雄, 加納平蔵, 菊地惟祐, 北村信一, 小糸(梶山)万里, 坂本(山本)光枝, 新藤英明, 鈴木保孝, 関野英次, 高山孝子, 武信(藤川)真弓, 田中繁彦, 西潟幸次, 西本健三, 原田牧夫, 本多務, 松本功, 松本喜市, 森和子, 山口智子, 吉野重親

7期　小豆沢信行, 安藤脩一, 植田忠夫, 小川(種井)友子, 小森谷守, 周明光, 玉井俊一, 日野美代子, 堀内(加野)桂子, 牧野(恩田)恵子, 持田(萩原)千和子, 柳沢靖好, 山崎(徳永)由美子, 渡辺崇志

8期　阿波克明, 伊藤秀孝, 海野広司, 太田一昭, 加藤(田谷)潤子, 工藤(薮みちよ)圭子, 笹栗(荻原)つくし, 佐藤征, 辻川照之, 土屋敬, 手塚(奥田)千穂, 西川正則, 速水(田村)登子, 福田昌平, 三崎弘, 宮田誠一, 山田紀子

9期　市川巌, 梶田裕, 門松(本多)紀子, 久保誠一, 桑本(野田)和子, 小玉伸二, 阪場(斉藤)建司, 佐藤(松原)光子, 鈴木英雄, 相馬宏晃, 高井(森末)晶子, 田中祥雅, 中島(中島)正恵, 長林義隆, 花房冨美子, 原田貞雄, 廣木豊憲, 藤田(細木)圭, 渡辺一雄

10期　石井一昭, 稲垣敬二, 岡陽一, 河村(松原)千代子, 菊池(小西)慧子, 栗原正博, 重久政人, 清水(南雲)和子, 関根(小出)美智子, 福田(荒木)トミ子, 八島惇六

11期　秋山憲二, 石井誠, 佐野輝男, 岡崎(宮本)そのえ, 小林(尾崎)盛子, 島村忠昌, 長谷川寿男, 藤川(菅谷)睦子, 水戸部(武藤)悦江, 峰島禧好

12期　相川隆, 片桐きよみ, 兼子勇, 熊高恒雄, 桜井善典, 林勉, 原正紀, 藤田精一, 星野(小原)京子, 丸田修, 向笠嘉典, 望月真美, 横山誠一

13期　相場典昭, 赤松俊明, 板倉敏夫, 鎌倉清治, 酒井眞澄, 中島幸夫, 橋本(有馬)和夫, 前田弘行, 村山暉之

14期　岡部次典, 片桐憲一, 木村(沼沢)玲子, 倉本熙之, 小林久雄, 米山光生

15期　金子(国分)富紀子, 菅原正雄, 埜藤あき子, 八田𠮷之, 福野剛樹, 前田享三, 町田(磯本)清美, 松井勢津子

16期　伊東伸佳, 大橋幸雄, 小竹大介, 小藤田春男, 佐藤一, 篠原誠, 二宮和子, 藤波(伊藤)典子

17期　浅野照雄, 石黒(大越)美津子, 伊東功一郎, 大久保善光, 古賀(小林)澄江, 柴田(池並)晶子, 鈴木勝己, 高市(松本)千代子, 鈴木利寿, 土井(門田)佳代, 矢野元久, 吉田(小川)真代美

18期　奥谷(渡辺)由美子, 道祖土(佐藤)隆子, 坂下(北野)悦子, 塩山(山川)真弓, 鈴木(堀中)秀子, 高田峰, 津田栄子, 藤田(佐野)美都子, 渡辺大一

19期　大嶋(笹森)陽子, 西岡光政, 松村国男, 三浦良茂, 山本(野沢)素子

20期　井出好昭, 内藤泰行, 松尾勲, 山田晃

21期　熊谷泰二, 小林新一, 三戸隆, 内藤猛, 山本祥人, 横田健

22期　阿部英雄, 伊藤隆康, 及川賢一, 大和合子, 吉田愛作, 吉田(渡辺)俊子

23期　川井田強, 斎藤(張)恵美子, 志村幸夫, 高瀬淳一

24期　小川(加藤)紀代美, 平島秀一, 宮下建一郎

25期　亀淵俊彦, 山本和彦, 青柳(渡辺)光子

26期　苅込直美, 木村秀幸, 杉浦知弥, 葉山栄

27期　五十嵐寛能, 佐藤(小倉)早苗, 鈴木尚美

28期　小勝裕子, 三浦恵吾

29期　竹野和広

30期　川崎秀哉, 小圷秀和, 沼崎(滝川)和子

32期　鈴木誠二, 玉木典子

34期　土橋克己

38期　飯田昭宏, 櫛田親弘

36期　前田由布子, 持田猛

38期　金澤(菊地)昭子, 中野淳子, 細井洋平

45期　新井一博

校友会事務局に、死亡日時、葬儀日時、会場、喪主をご連絡いただければ、会より弔電を打たせていただきます。

平成18年度　薬学部校友会研究奨励金研究報告

所属ユニット：衛生化学　渡　邊　雅　紀

研究課題：核に局在する銅結合タンパク質の機能解析

銅は、亜鉛やマンガンなどのいくつかの金属元素と同様に、生体内に保持されている量はごくわずかであるが、生命の維持に欠かすことのできない微量栄養素である。生体に必須の金属元素は、主に特定のタンパク質に結合することによって、そのタンパク質の働きを調節する役割を担っている。銅は、全ての臓器に存在し、cytochrome c oxidase、dopamine β-hydroxylaseあるいはsuperoxide dismutase-1などの銅要求酵素の活性中心に配位して、酸化還元反応を触媒している。我々は、核内に局在するRNA結合タンパク質non-POU-domain-containing, octamer-binding protein（NonO）が、銅と特異的に結合することを見いだした。本研究では、NonOの機能における銅結合の意義について解析した。

NonOは、二本鎖DNAの超らせん構造を緩和する活性を有するtopoisomerase Ⅰ（topo Ⅰ）と結合し、その活性を正に調節することが報告されている。FLAG-tagを付加したNonOあるいはNonOの銅結合領域を欠いた変異体（NonO ΔHis）をNeuro2a細胞に過剰発現させたのち細胞を溶解し、抗FLAG抗体で免疫沈降を行った。免疫沈降物中のtopo Ⅰ活性を測定した結果、NonO過剰発現細胞では強いtopo Ⅰ活性が見られたのに対して、NonOΔHis過剰発現細胞ではtopo Ⅰ活性は認められたものの弱い活性であった。免疫沈降物中のtopo Ⅰタンパク質量に変化がなかったことから、銅結合領域がtopo Ⅰ活性の調節に重要であることが明らかとなった。次に、精製したtopo Ⅰを用いて銅および銅キレーターの活性への影響を*in vitro*で検討した。その結果、銅とヒスチジンの錯体の存在下ではtopo Ⅰ活性の増加が認められた。一方、EDTAや銅のキレーターであるBCSやTTMの添加により、topo Ⅰ活性は顕著に低下した。また、リコンビナントNonOによるtopo Ⅰ活性の増強作用についても、銅キレーターの存在下では抑制されることが明らかとなった。以上のことから、NonOは、topo Ⅰ活性の発現に必須な銅を供給するタンパク質である可能性が示唆された。

会 合 予 告

第19回桜薬祭のご案内　母校を訪ねる日

第19回桜薬祭（薬学部学園祭）が来たる11月3日（土）・4日（日）の両日薬学部校舎で開催されます。

薬学部校友会では、11月3日（土）を「校友の母校を訪ねる日」と定めて当日参加校友(工学部薬学科・理工学部薬学科・薬学部卒業生)に昼食券(500円)を進呈しております。当日は校友会提供の「桜薬クイズ」や学生会員の研究発表も行われております。校友の皆様お誘い合わせの上ご来校ください。多数のご参加をお待ちしております。

日本大学薬学部校友会（通称　桜薬会）千葉県支部通常総会開催のお知らせ

日本大学薬学部校友会千葉県支部総会を下記により開催します。当日は桜薬祭が開催されており、母校を訪ねる日でもあります。多数ご参加くださいますようお願いいたします。

日時：平成19年11月3日（土）12時30分～
場所：日本大学薬学部

薬理学研究室同窓会（通称 薬物同窓会）開催のお知らせ

第23回薬理学研究室同窓会（薬物同窓会）総会および懇親会を下記により開催いたします。ご多用中とは存じますが、万障お繰り合わせのうえ、ご参加下さいますようお願いいたします。

記

日　時：平成19年11月17日（土）午後1時30分より
場　所：アルカディア市ヶ谷（TEL：03-3261-9921）
連絡先：薬理学研究室（TEL：047-465-3954または4027）

昭和32年卒2期生卒後50周年を祝う会開催のお知らせ

２期生同期会を下記により開催致します。多数のご参加をお待ちしております。

日　時：平成19年11月18日（日）午後4時30～6時30分
場　所：ホテルニューオータニ　タワー宴会場階　翠鳳
東京都千代田区紀尾井町４－１
TEL：03-3265-1111（代表）
２期生幹事　石黒・内田・一ノ瀬
連絡先：一ノ瀬　TEL：029-241-3152

会務報告

総務委員会　学内委員会
財務委員会　IT委員会
事業委員会　事務局

平成19年度校友会総会報告

平成19年度校友会通常総会は平成19年6月23日（土）午後1時30分から薬学部512教室で会員53名が参加し、名誉会長安西偕二郎薬学部長を迎えて開催した。山内　盛会長の挨拶、安西名誉会長の挨拶の後、会則により山内会長を議長に選出した。議事に入り、第1号議案（平成18年度庶務報告、事業報告、決算報告ならびに監査報告）について、審議し、可決承認された。第2号議案（平成19年度事業計画案ならびに予算案）および第3号議案役員承認については、原案とおり承認された。なお、議長より総会日程を日曜日に変更して欲しいとの希望がでているとの報告があり、出席者の意見では現状のままが良いとのことであった。総会終了後、平成19年3月に竣工した8号館（模擬薬局を含む講義・実習棟）の見学会を行った。引き続いて懇親会が多目的ホールで開催された。懇親会には、日本大学総長・理事長小嶋勝衛先生をはじめ薬学部長安西偕二郎先生、校友会本部事務局次長石澤恒男様、同僚学部校友会会長など

12名ならびに母校教職員多数を迎えて開かれた。薬学部長安西先生のご挨拶、ご来賓の紹介、総長・理事長小嶋先生のご挨拶、石澤事務局次長の音頭で乾杯し、開宴となった。定年で退職された恩師（渡邊和子先生）に山内会長より感謝状および記念品が贈呈された。また、校友会の事業である薬学部校友会研究奨励金による研究者；浅見　覚氏（35期）に対して研究奨励給付証書が山内会長から授与された。恒例の福引も行われ、次年度の再会を楽しみに散会した。

平成18年度第3回運営委員会報告

日　時：平成19年3月16日（金）18：00～20：00
場　所：日本大学会館　204号室
出席者：山内 盛（会長、4期）、渡邊和子(副会長 兼 総務委員会委員長、学内9期)、小林郁夫(副会長 兼 財務委員会委員長、10期)、高橋繁治(副会長 兼 学内委員会委員長、13期)、内倉和雄(副会長 兼 IT委員会委員長、学内14期)、伴野和夫(事業委員会副委員長、学内19期)、本橋重康(副会長 兼 事務局委員長、学内21期)、梅沢芳史(IT委員会副委員長、25期)、鳥山正晴(事務局副委員長、学内30期)、小山 隆(監事、1期)、齋藤好廣(監事、18期)、原田貞亮(常任幹事 兼 日本大学校友会監事、1期)　以上12名

【報告】

1. 事業委員会（伴野事業委員会副委員長）
   1）平成16年度版会員名簿追補－3発行について
   400部を印刷し、発行したとの報告があった。
   2）日本赤十字社救急員養成講習会中止について
   教本未完成のため、春期開催は中止したとの報告があった。
   3）桜薬会会報46号発行・発送について
   予定発行部数11,000部、4月下旬発送予定であるとの報告があった。
2. 学内委員会（高橋学内委員会委員長）
   1）卒業記念品について
   ダヴィンチシステム手帳を学部学生183人、院生42人に平成16年度版会員名簿追補－3と一緒に3月25日（日）の学位記伝達式で贈呈予定であるとの報告があった。
   2）桜薬会賞の授与
   4年　森田　肇　君（平成17年度桜薬祭実行委員長）にトロフィーを3月25日（日）の学位記伝達式で贈呈予定であるとの報告があった。
3. IT委員会（内倉IT委員会委員長）
   1）HPのリニューアルについて
   就職情報、会報、卒後教育のレジメなどをリニューアルしたとの報告があった。
4. 財務委員会（小林財務委員会委員長）
   1）平成18年度卒業生への会費納入説明会について
   平成19年1月30日（火）に卒業生（4年生）に対し、薬学部校友会の活動内容を渡邊副会長が説明し、会費納

入の依頼をしたとの報告があった。

2）国債の購入について

2月14日約定で国債額面29,850,000円（29,945,176円）を購入したとの報告があった。

5. 事務局（本橋事務局委員長）

1）平成18年度薬学部校友会奨学生について

薬学部校友会奨学生選考委員会により、高柳論也（M2年）、鈴木慎一郎（4年）さんの2名が奨学生候補者として教授会へ推薦された。第11回薬学部教授会において承認され、12月20日に開催された奨学生証書授与式で山内会長から奨学金が授与されたとの報告があった。

2）平成19年度薬学部校友会奨励金研究者について

薬学部校友会研究奨励金研究者選考委員会により、臨床医学ユニット　浅見　覚助手を候補者として教授会へ推薦された。第14回薬学部教授会において承認されたことおよび総会時に授与されるとの報告があった。

3）平成18年度総合講義試験問題集発行について

薬学部より依頼があったので、部数は一任で発行するとの報告があった。

4）52期（平成18年度卒業生）幹事および常任幹事について

森田 肇、矢作忠弘、後藤教嘉の3名が選任されたとの報告があった。

5）薬学部校友会事務局の引越しについて

平成18年度第14回薬学部教授会（平成18年12月14日開催）の審議事項「教育研究スペースの移転・転用」決定に従い、平成19年3月10日（土）に薬学部校友会事務局（137）は第三会議室（527A）に移転したとの報告があった。電話番号、アドレスには変更なし。

6. 工科系校友会幹事会（小林副会長）

平成19年度工科系連絡会は工学部が当番校で8月25日（土）に工学部（郡山）で開催予定であるとの報告があった。

7. 医療系同窓・校友連絡会（山内会長　代理 渡邊副会長）

1）第13回医療系同窓・校友連絡会について

日時：平成19年2月15日（木）日本大学会館204会議室

出席者：渡邊（山内、小清水、中村（均）委員欠席のため）

薬学部校友会が当番校で9月22日（土）午後2時日大会館で開催予定であり、各学部校友会より1題の演題で医療系分野に拡大すること（当番校枠で）が承認されたとの報告があった。

8. 本部校友会（山内会長）

1）本部校友会正会員について

すべての卒業生を日本大学校友会正会員にする様にとの指示文書を受けた学部校友会があるようだが薬学部校友会には来ていないこと、学部には卒業生とご父兄あての文章と振込用紙が送付されていることを確認した。

2）校友会館について

本年度決算で累計約8億円ぐらいの資金蓄積が出来る予定であること。小嶋総長は新年役教職員年頭会同及び3月の評議員会で校友会館建設について19年度に検討することを確約されたことが報告された。

3）全国校友大会について

平成19年度日本大学全国校友大会は11月12日（土）18時から開催されること、また、多くの校友が参加されるように要請されたことが報告された。なお、薬学部校友会では、学年幹事に案内状を送付しているが校友であれば自由に参加できるので多くの方を誘って頂きたいと要請があった。

4）箱根駅伝特別委員会について

薬学部校友会からは、会長、前田本部常任委員、原田本部監事が委員として参画したこと。資金は一口2,000円で集め、寄付者には応援ガイドが送付されたこと。薬学部校友会からの寄付は296,000円であり、寄付者氏名は会報で報告することが報告された。

5）学部校友会有志懇談会について

11学部校友会（歯学部・松戸歯学部は役員会のため欠席、文理学部欠席）が参加して経済学部・商学部両校友会の幹事で開かれた。各学部からは近況が報告されたが、本会からは情報開示請求に耐えうる運営、十分なコンプライアンスを考えて校友会運営をすべきではないかとの提案をしたこと、次回は（7月）は芸術学部と国際関係学部が幹事となり、学部校友会連絡協議会として会議と懇親会が開催されることが報告された。

6）校友会事務局員の雇用について

雇用条件を労働基準局に届け出て、労災保険に加入する必要との報告がされた。週20時間以上の雇用契約がある場合はハローワークに届け出て雇用保険に加入することが必要との報告があった。併せて19年度から法令に従って対応することが報告された。

9. その他

1）校友子女入学試験による「日本大学校友会特別優等生」について

平成19年度：神川典子さん（10名受験→5名合格）

【審議】

1. 平成18年度第2回運営委員会議事録（案）について（渡邊副会長）

一部修正の後、原案のとおり承認された。

2. 総務委員会　（渡邊総務委員会委員長）

なし

3. 事業委員会（伴野事業委員会副委員長）

なし

4. 学内委員会（高橋学内委員会委員長）

1）平成19年度入学記念品の選定について

品名・数量と金額は下記の通り決定した。

サンワサプライUSBメモリーUFD-256M2（名入れ含む）

2,140円/個、240個、計513,600円

2）薬学部校友会第4回入会記念講演会「薬学の世界」について

開催日時：平成19年5月12日（土）10：00～12：00

開催場所：薬学部651階段教室

演者は下記のとおりである。

・病院　　川井龍美氏

・製薬会社　　熊木北斗氏

・公務員　　芝野ゆう氏

3）薬学部スポーツ大会補助について

開催日時：平成19年5月19日（土）

飲み物：参加者（学生、教職員）

500円の商品券：参加学生のみ

5. IT委員会（内倉IT委員会委員長）

組織充実のためにもメールマガジンのcontentを検討及びAmazonへの加入についても検討することになった。

6. 財務委員会（小林財務委員会委員長）

なし

7. 事務局（本橋事務局委員長）

1）平成19年度幹事会開催場所について

理工学部1号館を予定（予定開催日：平成19年6月1日(金)）

8. 医療系同窓・校友連絡会（山内）

1）第6回日本大学医療系同窓・校友学術講演会の演者・演題・座長について

医療系同窓・校友連絡会で当番学部の裁量により当該学部校友会以外から演者を選定しても良いとの結論を受け、当番学部としての審議をした。薬学部校友会から演者を選定すべきであるとの意見や会員以外の演者であった場合は薬学部校友会からの聴衆が集まらないのではないかとの意見があったが、当初より当番が一巡したときには全学に輪を広げようとの意があったことを受けて今回は学部外から演者を選ぶことの結論を得た。演者の交渉は会長に一任することになった。座長は渡邊副会長が承認された。

検討事項

1. 給与表・退職金積立について
2. 会を代表して出張する場合の保険（傷害・賠償など）について

平成19年度幹事会報告

平成19年度幹事会は6月1日（金）午後6時から日本大学会館701号室において、役員参加者数37名で平成19年度日本大学薬学部校友会総会・懇親会の資料について審議を行った。

平成19年度入会記念特別講演会報告

第4回入会記念特別講演会「薬学の世界」が下記の通り新入会員（1年生）234名のもとで開催され、さらに入会記念品として参加者にUSBフラッシュメモリーが配布された。

日時：平成19年5月12日（土）10：00～12：00

場所：薬学部6号館階段教室

演題・演者

1.「学生時代に大切なもの」
アストラゼネカ株式会社　熊木北斗（49期）

2.「行政での薬剤師の役割」
東京都福祉保健局健康安全室　芝野ゆう（48期）

3.「これからの薬剤師」
東京慈恵会医科大学附属第三病院薬剤部 川井龍美（19期）

第1回学部校友会連絡協議会開かれる

昨年7月から3回の準備会を経て、本年7月21日（土）池袋メトロポリタンホテルで第1回 学部校友会連絡協議会が開かれました。

これまで全学部校友会間の連絡・協議はほとんどなく、薬学部校友会では学部独立以来、工科系連絡会（理工学部・工学部・生産工学部）での交流に限られていました。本校友会正会員の70％は理工学部出身でありますから、工科系出身者と各地で交流を深めてきました。反面、日本大学には医療系学部がありますのでそれらの学部とも交流を図って行く必要性から医学部・歯学部・松戸歯学部・生物資源科学部獣医学科と糾合し、医療系同窓・校友連絡会を作り交流と情報交換をし、年1回の学術講演会を開催してきました。しかし残りの学部校友会との交流はありませんでした。日本大学入学者の大部分は「総合大学であるから日本大学を選んだ」という人たちです。学生時代とは別に卒業後の交流の機会を増やすことは校友会の大事な使命と思います。学部校友会連絡協議会は夢実現のため第一歩と考えております。第1回会合は各校友会の現況報告に終始しました。

第2回連絡協議会は意思統一の手段として、各校友会の規定を話題に10月下旬開催で、以後年3回の開催を予定しています。

役員について（任期：平成19年度まで）

幹事　◎印　常任幹事

新任　第51期　高橋 玄

第52期　◎森田 肇、矢作忠弘、後藤教嘉

役員交代

学　内　◎渡邊和子(9期)が定年により◎齋藤弘明(46期)に交代

第９期　吉田哲朗が ◎渡邊和子に交代

平成18年度決算報告

18. 4. 1～19. 3. 31

○本部還付金

科　　目	還付額	振替先	差　異△
本部還付（正会員）	96,000		
年会費充当		78,000	
雑収入（寄付金扱）		18,000	0
本部還付（準会員）	7,553,000		
入会金充当（半額）		2,680,000	
年会費充当		2,158,000	
前納会費充当		2,715,000	0
合　　計	7,649,000	7,649,000	0

○収入の部

科　　目	予　算	決　算	差　異△
入会金	2,650,000	2,690,000	40,000
年会費	8,388,000	7,777,000	△ 611,000
前納会費積立	(5,348,000)	(5,079,000)	
当年度納入	(3,040,000)	(2,698,000)	
利子	200	13,877	13,677
雑収入	500,000	515,000	15,000
前年度繰越	1,107,367	1,107,367	0
合　　計	12,645,567	12,103,244	△ 542,323

○支出の部

科　　目	予　算	決　算	差　異△
1 事業費合計	6,786,000	6,313,722	△ 472,278
1 会誌発行費	3,250,000	2,934,707	△ 315,293
印刷費	(1,750,000)	(1,669,500)	(△ 80,500)
編集費	(100,000)	(80,154)	(△ 19,846)
発送費	(1,400,000)	(1,185,053)	(△214,947)
2 活動補助費	3,136,000	3,000,815	△ 135,185
卒後教育講座	(300,000)	(300,000)	(0)
支部等	(500,000)	(374,020)	(△125,980)
学生会員	(2,336,000)	(2,326,795)	(△ 9,205)
3 HP管理費	400,000	378,200	△ 21,800
2 会議費合計	1,300,000	1,098,412	△ 201,588
1 総会費	600,000	535,685	△ 64,315
2 委員会費	150,000	92,641	△ 57,359
3 印刷費	100,000	82,272	△ 17,728
4 発送費	450,000	387,814	△ 62,186
3 事務局費合計	2,500,000	2,212,917	△ 287,083
1 管理費	390,000	308,382	△ 81,618
2 人件費	1,700,000	1,524,960	△ 175,040
3 旅費交通費	250,000	254,060	4,060
4 通信費	160,000	125,515	△ 34,485
4 その他合計	1,430,000	1,326,095	△ 103,905
1 本部等分担金	830,000	852,000	22,000
2 慶弔費	600,000	474,095	△ 125,905
5 予備費	629,567	329,000	△ 300,567
6 次年度繰越金	0	823,098	823,098
合　　計	12,645,567	12,103,244	△ 542,323

平成19年度予算案

19. 4. 1～20. 3. 31

○本部還付金

科　　目	予　算	前年実績	差　異△
本部還付（正会員）	96,000	96,000	0
年会費充当	(80,000)	(78,000)	(2,000)
雑収入（寄付金扱）	(16,000)	(18,000)	(△ 2,000)
本部還付（準会員）	8,050,000	7,553,000	497,000
入会金充当（半額）	(2,600,000)	(2,680,000)	(△ 80,000)
年会費充当	(2,300,000)	(2,158,000)	(142,000)
前納会費充当	(3,150,000)	(2,715,000)	(435,000)
合　　計	8,146,000	7,649,000	497,000

○収入の部

科　　目	予　算	前年実績	差　異△
入会金	2,600,000	2,690,000	△ 90,000
年会費	8,280,000	7,777,000	503,000
前納会費積立	(5,280,000)	(5,079,000)	(201,000)
当年度納入	(3,000,000)	(2,698,000)	(302,000)
利子	15,000	13,877	1,123
雑収入	500,000	515,000	△ 15,000
前年度繰越	823,098	1,107,367	△ 284,269
合　　計	12,218,098	12,103,244	114,854

○支出の部

科　　目	予　算	前年実績	差　異△
1 事業費合計	6,700,000	6,313,722	386,278
1 会誌発行費	3,150,000	2,934,707	215,293
印刷費	(1,800,000)	(1,669,500)	(130,500)
編集費	(100,000)	(80,154)	(19,846)
発送費	(1,250,000)	(1,185,053)	(64,947)
2 活動補助費	3,150,000	3,000,815	149,185
卒後教育講座	(300,000)	(300,000)	(0)
支部等	(450,000)	(374,020)	(75,980)
学生会員	(2,400,000)	(2,326,795)	(73,205)
3 HP管理費	400,000	378,200	21,800
2 会議費合計	1,300,000	1,098,412	201,588
1 総会費	600,000	535,685	64,315
2 委員会費	150,000	92,641	57,359
3 印刷費	100,000	82,272	17,728
4 発送費	450,000	387,814	62,186
3 事務局費合計	2,650,000	2,212,917	437,083
1 管理費	450,000	308,382	141,618
2 人件費	1,600,000	1,524,960	75,040
3 旅費交通費	450,000	254,060	195,940
4 通信費	150,000	125,515	24,485
4 その他合計	1,430,000	1,326,095	103,905
1 本部等分担金	930,000	852,000	78,000
2 慶弔費	500,000	474,095	25,905
5 予備費	138,098	329,000	△ 190,902
6 次年度繰越金	0	823,098	△ 823,098
合　　計	12,218,098	12,103,244	114,854

警告（日本大学新聞から転載）

最近、原理研究会＝統一教会系とみられる団体が『日大学生新聞』と称する新聞を発行し、校友や父母に広告の依頼や年間2万円もの高額な購読料で案内の電話をしています。

日本大学新聞は85年の伝統を持つ大学機関で電話による購買、その他のお願いは一切しておりません。また、日本大学新聞の購読料は2年間で4,000円です。ご注意下さるようお願いいたします。

注意（会員名簿の取扱いについて）

日本大学では「個人情報保護に関するガイドライン」を定めております。薬学部校友会もガイドラインに沿い個人情報の保護に万全を期すよう努めております。

平成16年度版会員名簿は配布先を薬学部校友に限定し、すべての冊子に番号を附し、配布台帳に記載して配布先を明確にしております。名簿資料は大学・校友会・ユニット及び卒業期から皆様への情報提供以外には使用いたしません。皆様もお手元の校友名簿の管理には十分なご配慮をお願いいたします。

校友会事務局

会費納入のお願い

会員名簿資料に会費納入状況が印刷されています。
（会員番号に☆印のある方は未納です。）

未納の方は同封振込用紙で会費納入をお願いいたします。
会費は年額2，000円です。
事務簡素化のため5年分10,000円又は10年分
20,000円を一括納入して頂ければ幸甚です。

事務局より

ホームページ求人・求職のIDについて

日本大学薬学部校友会ホームページの求人・求職のコーナーに入るためにはIDとパスワードが必要です。

IDは宛名の下にある正会員番号の下6桁（半角）、パスワードは氏名（全角カタカナ）になります。ID・パスワードは毎年10月の末に一括更新しております。本年3月に卒業された方は、10月までは学生時のID・正会員のIDどちらでも入れますが、それ以降は正会員のIDをお使いください。氏名の変更をお届けいただいた方は、10月までは旧氏名となります。

会費納入報告

財務委員会

会費を納入いただきました会員の方々の名簿です。ご協力ありがとうございました。誤りがありましたらお知らせください。なお、本部準会員（薬学部学生会員）会費納入者は人数のみのご報告とさせていただきます。

（平成19年3月1日～8月31日）

会費納入者

2,000円納入者

56笠井能子, 狐塚識夫, 狐塚治子, 森本達也 58大淵洋子, 小野都子, 金子佐知子, 斎藤友美, 佐藤フク子, 佐藤雅子 59木村清, 矢野哲比古 60高野俊彦, 立神康博, 豊田亮三 61岩瀬光江, 江花恭子, 小林和子, 辻厚子 63泉澤晴子, 寺澤正孝 64小室則子, 西川宣征, 廣瀬慶子 65秋元敦信, 筒井力彦 66稲垣英夫 68稲垣房子 70太田正昭 71泉広栄, 仲由紀子 72小原章, 北中進, 山下和代 73久保山昇, 福田幸雄 74松村昌子, 渡辺伊正 77安部貞詔, 福田恵子 79大塚正征, 北中友子, 田邉浩二, 深澤厚子 80秋山稔, 関和優子, 斎藤容子 81谷川清澄, 田中滋子 82栗原孝, 渡辺正実 86阿部幸生, 大月久朗, 三宅智子 87藤本久美 88森由美91極檀幸次 95小池理恵 97岡添進, 中里裕之　以上 60名

4,000円納入者

56大石峰子, 大林温, 大林満江, 鈴木隆子 59澤地次雄 60川上恭子 61小山登志江, 玉田輝巳 78上田忠司 82木村高久 86大竹富治 87河名万千子 91井上学, 小山由美　以上 14名

6,000円納入者

59大島芳郎, 山田茂　以上 2名

10,000円納入者

56足立卯子, 久藤一馬, 原田順子 57金井かほる, 斉藤允子, 平山薫 58藤野睦夫 59浦野保, 高梨久美子, 中本光子, 新村節子 60大山由布子, 高橋康雄, 中西弘, 八杉文子 61坂本壽子 63安保万里子, 小倉允子, 尾崎展男, 小山巳知子, 齋藤紀子, 高松田鶴子 64牛山妙子, 関良子, 須山百合子, 中島恵子, 増木良子 65久保田慶子, 徳山靖郎, 松岡寿夫 66大貫秀實, 関根和子, 武田幸代, 松田光弘 67石倉芳夫, 新佛賢明 68佐藤妙子 69鍵山佳子 70石井久夫, 牧村紀子 71小儀國太郎, 小久保実 72大久保秀子, 榊原剛, 関けい子, 武井康子, 名塚登美子, 二俣哲夫 73中村薫 74香坂瑞代, 越野裕, 白石正子, 内田順子 75笹原紀代美, 玉木恵子 76木下三千子 76吉田晴子 77上田貴久子, 藤澤緑, 立山京子, 長瀬健市, 平形千鶴子, 矢島康男 78内山隆, 笠原義正, 木村郁郎, 三枝章人, 白川享 79澤島千恵子, 西岡寛野, 濵崎利彦, 村山琮明 80岩村勝, 遠藤尚登, 中沢由里子 81潮田龍一郎, 工藤純子, 三浦啓一 82安藤雅, 田内悦子, 中村由美子 83井上泰三 85伊藤愛子, 松崎桂子, 杉中淳 86高尾富子, 西原ユミ 87石井武男, 瀧本智恵, 大高芳子, 瀧本啓, 中村恵子, 堀切明子 88瀬ノ尾啓泰 91宇佐美裕子 93木村文子, 田辺香織 94毛利英 96北村章代, 宮田郁子 97高橋秀行, 清水博 99岡澤美穂子 01中島慎一郎 07岩瀬正史, 江口実沙, 尾池智子, 沖村沙織, 沖山佳奈, 金巻由美子, 川上麻美, 小林妙子, 坂井隼人, 島田喜進, 下田康代, 諸喜田明利, 鈴木慎一郎, 出川雄大, 照井一絵, 入田明子, 野秋隆太郎, 原田真喜子, 比嘉崇之, 福嶋友美, 藤浪由佳, 前田康多, 宮本博司, 室田紗希, 山岸由佳, 山下笑美理, 吉田香織, 吉田怜, 渡辺裕治　以上133名

12,000円納入者

07勝敦史, 宮岸寛子　以上 2名

20,000円納入者

58三谷由美子 64小久保光昭 65辻野英子 71吉田雅子 72石田道子 77石井博一 78松沢清枝 79大川葉子 83黒須さゆり 84津嘉山祥子 91石井政徳 92細川正恵 96小豆畑穣, 佐藤洋子, 中村哲朗 97須田篤博, 須藤直子, 羽佐田祥浩, 伊熊久美子 02杉山恵理 07猿田紀子, 荻野智之, 後藤教嘉, 土橋真理子, 丹羽潔枝, 萩野晃生, 森河ちひろ, 山中明日子　以上 28名

平成18年度本部正会員会費納入者
（薬学部校友会へ会費還付があった者）

56原田貞亮 57一ノ瀬衛, 髙仲正, 中山純雄 59山内盛 60奥窪伸之, 斉藤文夫 61前田敏晴 63武井侑代 64小松康宏, 渡邊和子 65小林郁夫, 近藤千代子 68高橋繁治 69坂田秀臣 70宇野澤まり子 73鈴木真知子 74伴野和夫 75土井正道, 鎌田みづ江 76石田制利, 鈴木孝, 本橋重康, 吉田善一 77立山京子 78阪本智子, 高野英夫 79川島仁子, 齊藤順子 80梅沢芳史 90西村伸大94土屋晃一 96荒川基記 98横山寛　以上 34名

平成18年度本部準会員会費納入者人数
（薬学部校友会へ会費還付があった者）

修士2年	1名	
学部2年	1名	
学部4年	4名	以上 6名

平成19年度本部準会員会費納入者人数
（薬学部校友会へ会費還付があった者）

博士1年	9名	
博士2年	6名	
博士3年	7名	
修士1年	44名	
修士2年	29名	
学部1年	262名	
学部2年	247名	
学部3年	259名	
学部4年	290名	以上1,153名

発行日　平成19年10月15日
編集人　日本大学薬学部校友会事業委員会
発行人　日本大学薬学部校友会　山内　盛
印刷所　協友印刷㈱
TEL 03－3267－8056

発行所　千葉県船橋市習志野台7－7－1
日本大学薬学部内（〒274-8555）
電話・FAX 047－465－1478（直通）
e-mail: alumni@pha.nihon-u.ac.jp
振替口座番号　00140－0－53798
振替口座名　日本大学薬学部校友会